

八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 32

- I 久宝寺遺跡 (第5次調査)
- II 久宝寺遺跡 (第7次調査)
- III 萱振遺跡 (第9次調査)
- IV 萱振遺跡 (第10次調査)
- V 東弓削遺跡 (第5次調査)
- VI 木の本遺跡 (第4次調査)

1991年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



八尾市埋蔵文化財発掘調査報告

- I 久宝寺遺跡 (第5次調査)
- II 久宝寺遺跡 (第7次調査)
- III 萱振遺跡 (第9次調査)
- IV 萱振遺跡 (第10次調査)
- V 東弓削遺跡 (第5次調査)
- VI 木の本遺跡 (第4次調査)

1991年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は、河内平野のほぼ中央部に位置し、温暖で肥沃な土壤に恵まれた地域であり、幾多の先人達が残していく文化遺産が数多く遺存しております。近年では急激な開発事業に伴ってこれらの貴重な文化財が消滅しつつあります。その様な状況下にあって、開発による破壊から文化財保護に務め、それらの貴重な資料を後世の市民のために伝承していくことは、私達の重要な使命であります。

今回、当調査研究会が平成2年度に実施しました久宝寺遺跡（第5次・第7次調査）・萱振遺跡（第9次・第10次調査）・東弓削遺跡（第5次調査）・木の本遺跡（第4次調査）の調査が完了し、ここに報告書としてまとめることができました。

本書が広く本市の歴史を研究する上で貴重な資料として活用されるとともに、少しでも文化財保護のために役立てていただければ幸です。

最後になりましたが、各調査の実施にあたり、ご指導とご協力を賜りました関係機関各位に対しまして、心から厚くお礼を申し上げます。

平成3年4月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 福島 孝

序

1. 本書は財團法人八尾市文化財調査研究会が平成2年度に実施した発掘調査成果の報告を集録したもので、内業整理及び本書作成業務は各現地調査終了後に着手し、平成2年度をもって終了した。なお、報告書の末に八尾市教育委員会文化財室からの指示書を掲載した。
1. 本書に集録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書の構成・編集は岡田清一が行い、文責等は各例旨に明示した。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（昭和57年11月1日発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（昭和63年4月1日改訂）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面である。
1. 本書で用いた方位は、磁北を示している。
1. 遺構は下記の略号で表した。

堅穴住居	—	S I	溝	—	S D	井戸	—	S E	土坑	—	S K
小穴	—	S P	自然河川	—	N R						
1. 実測図の縮尺は、遺構が20分の1・40分の1・50分の1・100分の1を基調とし、遺物は大きいものは6分の1、小さいものは2分の1、他は4分の1に統一した。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した。
弥生土器・土師器・瓦器・瓦・埴輪・石類・白、須恵器・黒、木製品・斜線。
1. 各調査に際しては、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、広く利用されることを希望する。

目 次

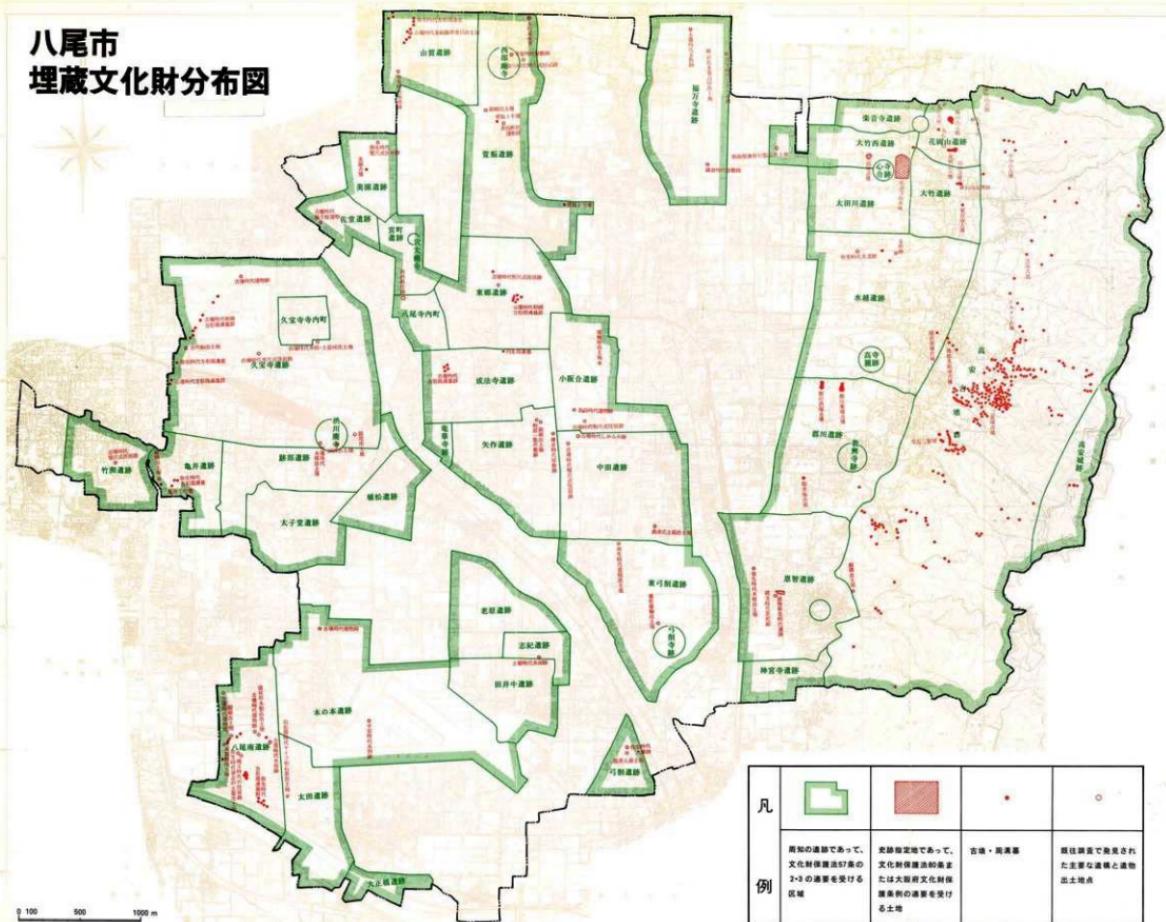
はしがき

序

八尾市埋蔵文化財分布図

I	久宝寺遺跡（第5次調査）	1
II	久宝寺遺跡（第7次調査）	9
III	貴振遺跡（第9次調査）	13
IV	貴振遺跡（第10次調査）	19
V	東弓削遺跡（第5次調査）	21
VI	木の本遺跡（第4次調査）	29
VII	指示書	37

八尾市 埋蔵文化財分布図



0 100 500 1000 m

I 久宝寺遺跡 (K H90-5)

例　　言

1. 本書は、八尾市北龜井町2丁目地内で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書に報告する久宝寺遺跡第5次調査（KH90-5）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成2年4月15日～4月22日にかけて、高萩千秋を担当として実施した。調査面積は24m²を測る。
1. 本書に関わる業務は、高萩が担当した。

本　文　目　次

1.はじめに	1
2.調査概要	2
1) 基本層序	2
2) 検出遺構と出土遺物	4
3.まとめ	7

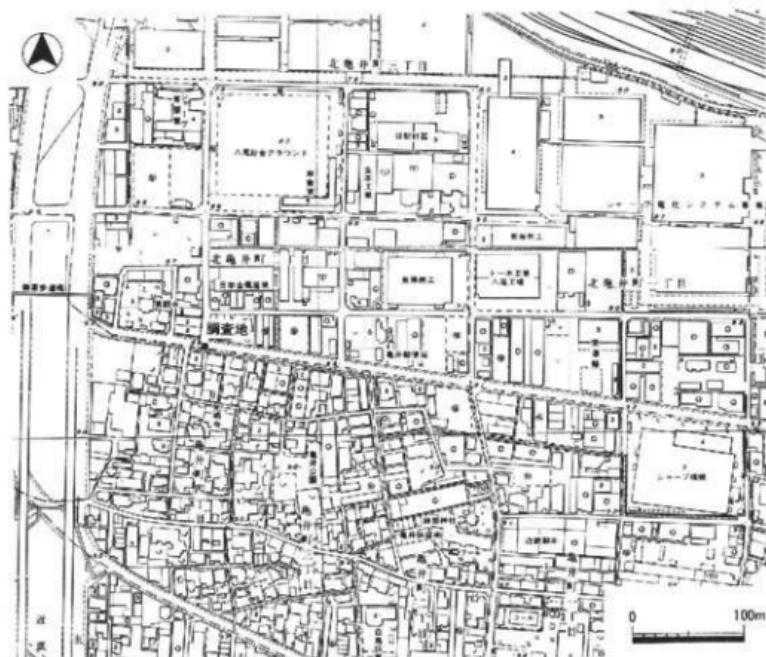
I 久宝寺遺跡 (K H 90-5)

1. はじめに

久宝寺遺跡は、八尾市の西部に当る久宝寺一帯に存在する弥生時代～近世に至る複合遺跡で、旧大和川の主流である長瀬川と平野川に挟まれた沖積地上に位置する。現在の標高は(T P + 8～9 m) を測る。

周辺には当遺跡と同様、弥生時代から発展してきた遺跡が密集している。南東には跡部遺跡、南西には竹瀬遺跡・加美遺跡、南には亀井遺跡、北には美園遺跡などが接している。

今回の発掘調査は、公共下水道に伴うもので、当調査研究会が当遺跡で実施した第5次調査にある。



第1回 病院区位置圖

2. 調査概要

調査地は、亀井遺跡と久宝寺遺跡の接点にあたり、東部約40mの所には鎌倉時代の积迦寺跡が調査で確認されている真觀寺がある。調査は下水道工事の立坑部分（6×4m）で、表土掘削は現地表下1.5mまでを機械で行い、以下、1mの土層を調査対象とする人力掘削の実施であった。しかし、調査区の周辺が工業地域及び主要道路への抜け道でもあり、平日の交通量が非常に多く、道路封鎖の許可が得られなかった。その為、やむなく夜間の発掘調査をせざるを得なかった。調査期間は平成2年4月15日～4月22日である。調査面積は24m²を測る。

1) 基本層序

調査区の基本層序は、第2図に示すとおり12層に分けられる。

第1層：盛土（アスファルト・パラス等（層厚40cm）。

第2層：暗灰色砂質土（層厚30cm）。

第3層：灰青色細砂混結質土（層厚40～50cm）。

第4層：茶灰色粘質土（層厚30～40cm）。

第5層：茶黄色粘質土（層厚10～15cm）。

第6層：青灰色粘質シルト（層厚30cm）。植物遺体を含む。

第7層：黒青色粘土（層厚10cm）。

第8層：青灰色微砂（層厚30cm）。

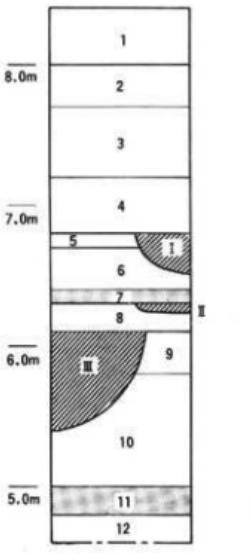
第9層：暗灰青色粘土（層厚30cm）。

第10層：青灰色粘土（層厚80cm）。

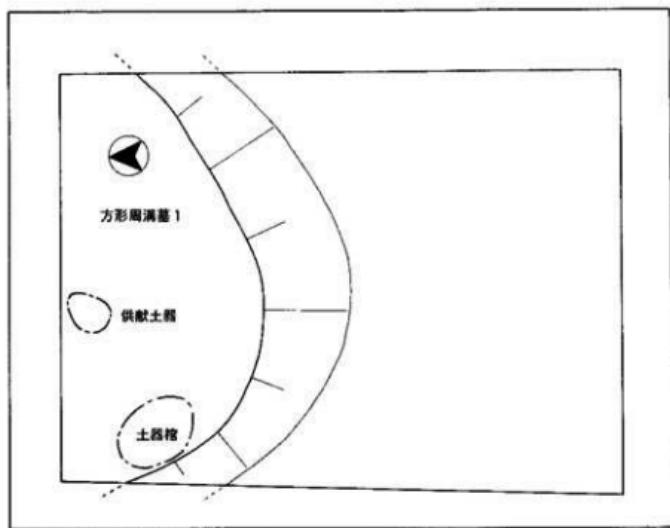
第11層：暗青黑色粘土（層厚20cm）。

第12層：青灰色粘質土（層厚20cm以上）。

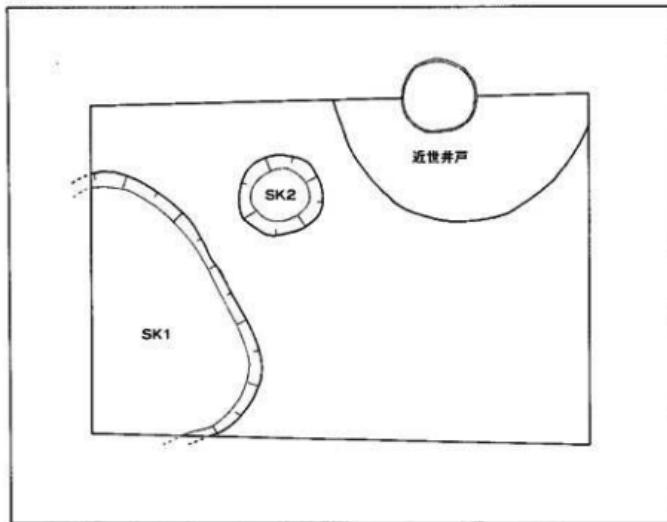
第1～4層は中世から近世までの土層で、ほとんどが道路工事によって攪乱されており、近世井戸の残存を検出しただけで、中世から近世の時期の遺構状況を掘むことができなかった。第6層上面では古墳時代前期に比定される遺構を検出した。第8層上面では弥生時代中期の氾濫で埋没した墓を検出した。第9層以下では遺構・遺物は確認していない。



第2図 基本層序柱状図



第1調査面



第2調査面

0 2m

第3図 遺構平面図

2) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、弥生時代中期～近世に至る遺構・遺物を検出した。弥生時代中期に比定される土器棺1基とそれに伴う供獻土器・自然河川1条、古墳時代前期（布留式中相）に比定される土坑2基、鎌倉時代に比定される溝1条、江戸時代後期に比定される井戸1基を検出した。出土遺物は、弥生時代中期～江戸時代に至る遺物（土器棺含む）がコンテナ箱にして2箱分出土した。以下、各時代の遺構について記す。

弥生時代中期

土器棺1

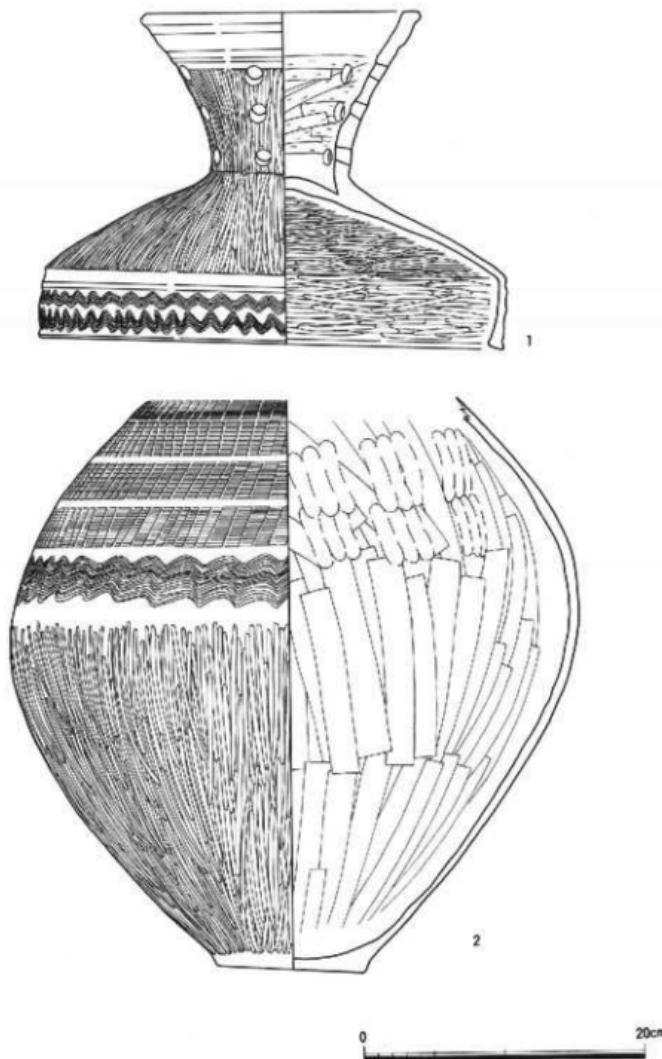
調査区北部の標高5.5mを測る青灰色粘土上面で検出した。主体部は棺身に蓋（1）・蓋に台付鉢（2）を使用した土器棺である。棺身の蓋は口縁を北にして寝かし、その口縁に台付鉢の体部で蓋するようにしてかぶせていた。検出時は上部が内側に入り込んでおり、土圧により破損したものと考えられる。蓋の内部には下部に有機物を含む土が薄く堆積している以外、内部は空洞であった。人骨やその他のものはなかったが、北東側へ約0.8mの所で直立した壺（3）と高杯（4）がセットで出土しており、供獻土器の可能性が考えられる。土器棺の掘形は検出することができなかった（深夜の調査でもあり、土層の見極めが非常に困難であった）。

土器棺及び供獻土器は、畿内第Ⅳ様式に比定されるものである。棺身の蓋は、口縁が打ち砕かれている。体部の最大径40cmを測る橢円形で、底部は突出気味の平底である。調整は、体部外面上位に瘤状文・波状文、下位に施研きを施している。蓋にしている台付鉢は、器高23cm、口径33cmを測る。壺部は外上方へ伸びた後屈曲し、上方へ伸びる口縁部に至る。端部は上に面をもつ。脚部は外下方に開き、3段7方の円孔が穿孔している。調整は壺部上位外面上に波状文、その他は丁寧な施研きを施している。胎土は在地土である。

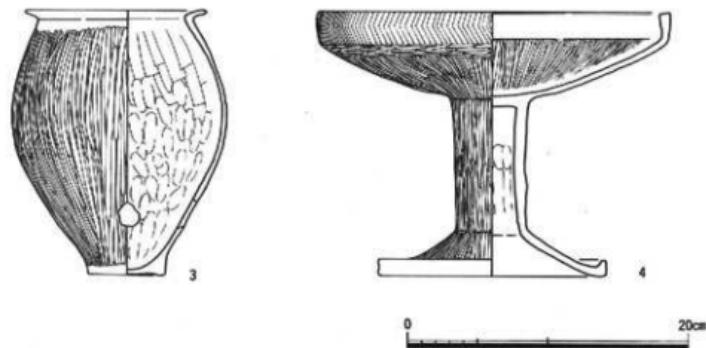
供獻土器の壺は、器高19cm、口径13cmを測るやや小型のものである。底部は平底で、体部が最大径を上位にもつ卵形である。口縁は大きく屈曲し、水平方向へ短く伸びる。体部外面上に施研きが施されている。高杯は、口径25cm、器高18.5cmを測る。壺部は外上方へ伸びた後屈曲し、上方へ短く伸びる口縁部に至る。脚部は筒状の柱状部から屈曲し、外下方へ大きく開く。端部は上方へ拡張し、面をもつ。調整は口縁端部付近の外面に綾杉文、その他は丁寧な施研きを施す。胎土は壺・高杯ともに生駒山西麓産である。

NR-1

調査区の南側で砂層の堆積する河川跡を検出した。調査区では3分の2を占めている。南東～北西方向に伸びるものと考えられる。河川の深さは50cmで、幅は調査区外に至り不明である。



第4図 土器柱実測図



第5図 供献土器実測図

古墳時代前期

第6層上面で布留式古相に比定される土坑2基（SK1・SK2）を検出した。以下、個々の造構について記す。

SK1

調査区の北西部で検出した。北部は調査区外に至り、平面の形状は不明である。規模は検出部で、東西1.8m、南北1.2m、深さ15cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は、暗灰色粘質土と青灰色シルトの互層である。遺物は、内部から布留式古相に比定される布留式甕の小片がごく少量出土している。

SK2

調査区の東部で検出した。平面は円形を呈する。規模は検出部で、径60cm、深さ10cmを測る。堆積土は、SK1と同一土層である。遺物は出土しなかった。

江戸時代

井戸

調査区の南東部で検出した井戸欄を備えた井戸である。井戸の掘形は攪乱層下からの切り込みである。全形は不明であるが、径2mを測る。井戸枠は、現地表面から約2.5mの所で径80cm、高さ60cmを測る桶を検出した。堆積土は、掘形及び井戸側内部に砂を基調とした埋土である。遺物は、井戸側内から江戸時代の陶質土器・瓦などの小片がごく少量出土している。

3.まとめ

今回の発掘調査は現道路の敷面下で、しかも小面積で、夜間という最悪の調査であり、土層などの色調がわかりにくく、遺構を検出することが非常に難しい調査であった。

調査区は真親寺に隣接することから、それに関連する遺構が予想されたが、地表下1.4mまでの土層は、ほとんどが公共施設（ガス・水道など）による工事掘削で搅乱されており、その状況を掴むことができなかった。調査区の南東部では近世の井戸と北西部で砂層の堆積する溝が確認されただけである。

下層の調査では、第6層上面（標高6.2m）から切り込む古墳時代前期（布留式期）の土坑2基を検出した。この時期の遺構は周辺の調査でも検出しており、その広がりが確認された。さらに0.5m下の第8層上面（標高5.7m）で弥生時代中期（畿内第IV様式）に比定される土器棺1基を検出し、この付近周辺が墓域であることが判明した。この時期の遺構は調査区西側の近畿自動車道に伴う調査でも検出しており、東部への広がりが確認された。

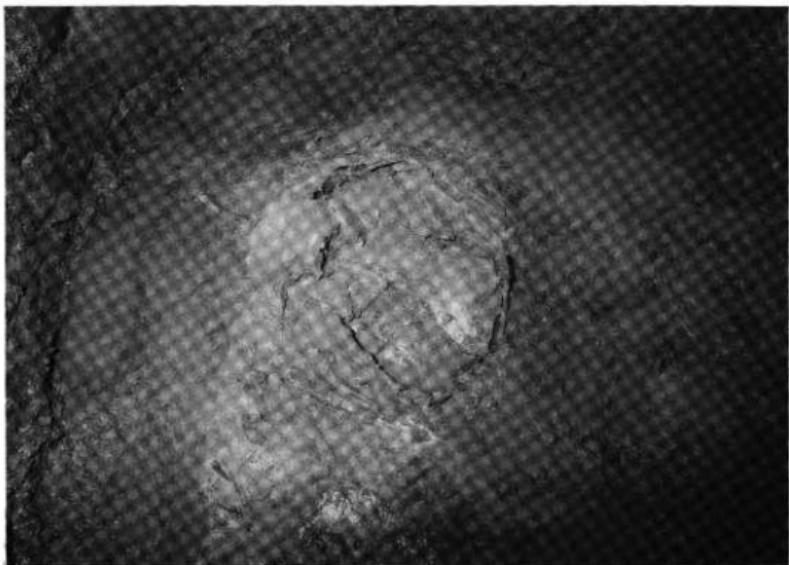




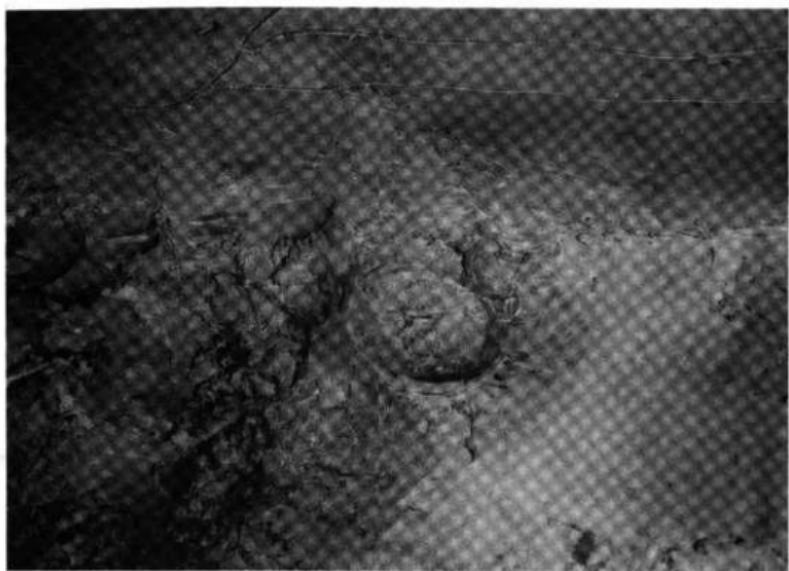
第2調査面全景(南から)



第1調査面 方形周溝基(南から)



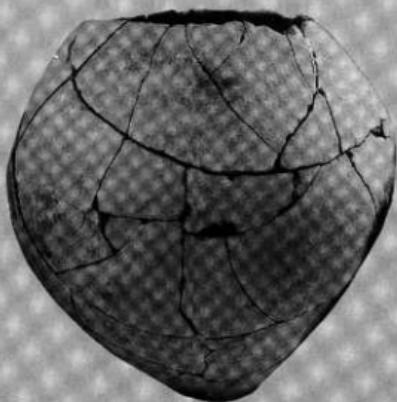
土器棺（南から）



共窯土器（南から）



1



2



3



4

土器棺 1・2 供獻土器 3・4

II 久宝寺遺跡 (K H90-7)

例　　言

1. 本書は、八尾市渋川町5丁目33番地で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査報告である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第7次調査（KH90-7）の発掘調査業務は、財團法人八尾市文化財調査研究会が木内芳子氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成2年12月17日から平成2年12月21日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は54m²を測る。なお、調査においては真柄竜・垣内洋平が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後実施し平成3年7月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－田島和恵の他は原田が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

目　　次

1	はじめに	9
2	調査概要	10
1)	調査方法と経過	10
2)	基本層序	11
3)	出土遺物	11
3	まとめ	12
4	出土遺物観察表	12

II 久宝寺遺跡第7次調査（K H90-7）

1 はじめに

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた三角州上の微高地に位置する縄文時代晚期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾市北西部の北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・龜井・北龜井町・渋川町の東西1.7km南北1.4kmがその範囲とされている。

今回の調査地点である八尾市渋川町5丁目33は遺跡範囲の南東部にあたり、調査地点の西側は白鳳時代の創建とされている渋川廃寺の推定地と隣接している。渋川廃寺内では平成2年3～4月にかけて渋川町5丁目41で、(財)八尾市文化財調査研究会が発掘調査（SKT89-1）を実施しており、渋川廃寺の創建期のものとみられる遺構・遺物が検出されたほか、屋瓦では鶴尾が出土しており、寺域の範囲を推定するうえで貴重な資料を提供する結果となった。

今回の調査地は前記の調査地の東100m地点に位置し、八尾市教育委員会文化財室が平成2



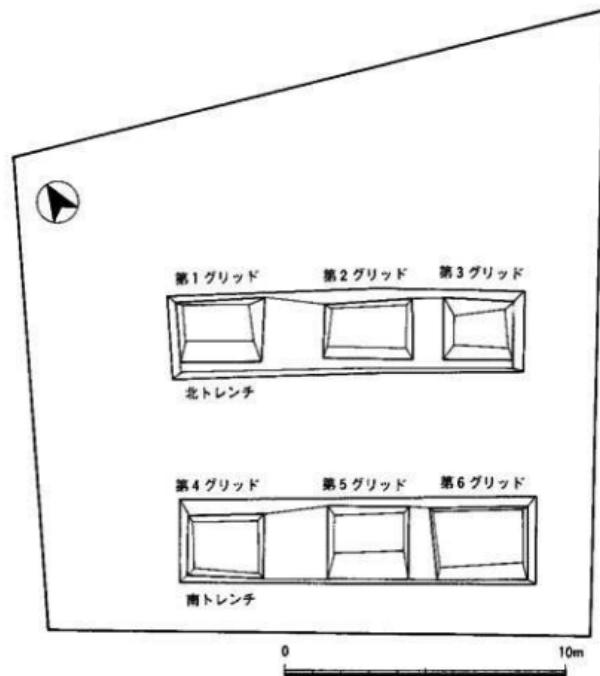
第1図 調査地周辺図

年12月7日に実施された造構確認調査で奈良時代から平安時代の遺物が出土したことから、発掘調査を実施するに至ったもので、事業者と八尾市教育委員会文化財室・(財)八尾市文化財調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき(財)八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施した発掘調査である。現地発掘調査の期間は平成2年12月17日～12月21日で、調査面積は54m²を測る。

2 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅の建設に伴うもので、建物の基礎部分を調査対象とした。調査では基礎部分に合わせて東西方向にトレンチを2本(3×12.5m)設定した。両トレンチともに



第2図 調査区設定図

機械により1.2m前後を掘削した後、基礎部分に合わせて3×3mのグリッドを6箇所（北トレンチー第1グリッド→第3グリッド、南トレンチー第4グリッド→第6グリッド）設定した。グリッド内は層理に従って人力掘削を1m前後実施し、遺構・遺物の検出に務めた。その結果、遺構は検出されなかったが、第4層（奈良時代）、第7層（古墳時代後期）で遺物包含層の存在を確認した。遺物の出土量は、第4層・第7層を合わせてコンテナ箱に四分の一程度である。

2) 基本層序

第0層 盛土。層厚0.7m前後。上面の標高はT.P.+

9.75m前後。

第1層 灰色砂質土。旧耕土。層厚0.15m前後。

第2層 緑灰色砂質土。床土。層厚0.15~0.35m。

第3層 明緑灰色粘質土。層厚0.1~0.25m。調査地の北西部では存在しない。

第4層 褐色粘質土。層厚0.1~0.25m。奈良時代の遺物を少量含む。

第5層 明青灰色粘質土。層厚0.1~0.3m。

第6層 青灰色粘土。層厚0.2~0.55m。

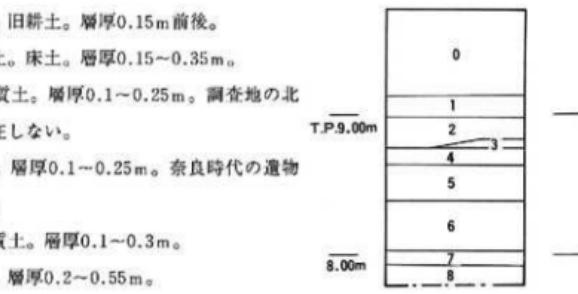
第7層 緑灰色粘土。層厚が0.1~0.2m。古墳時代後期の遺物を少量含む。

第8層 青灰色シルト。層厚0.45m以上。

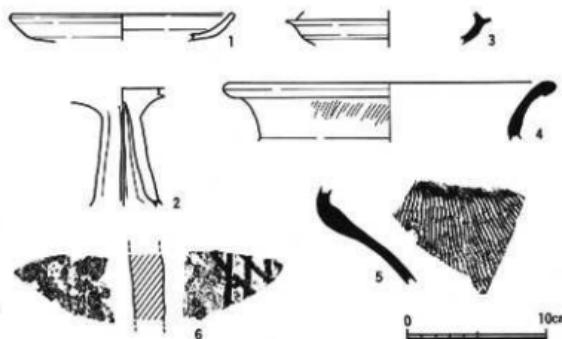
3) 出土遺物

遺物は第4層および第7層からコンテナ箱に四分の一程度出土した。大半が小破片で、図示できたものは6点(1~6)である。

図示した遺物の出土層は、1・6が第4層で他はすべて第7層である。遺物の内訳は、土師器中皿(1)・高杯(2)、須恵器杯身(3)・広口壺(4)・壺(5)、平瓦(6)である。



第3図 基本層序模式図(1/40)



第4図 出土遺物実測図

3まとめ

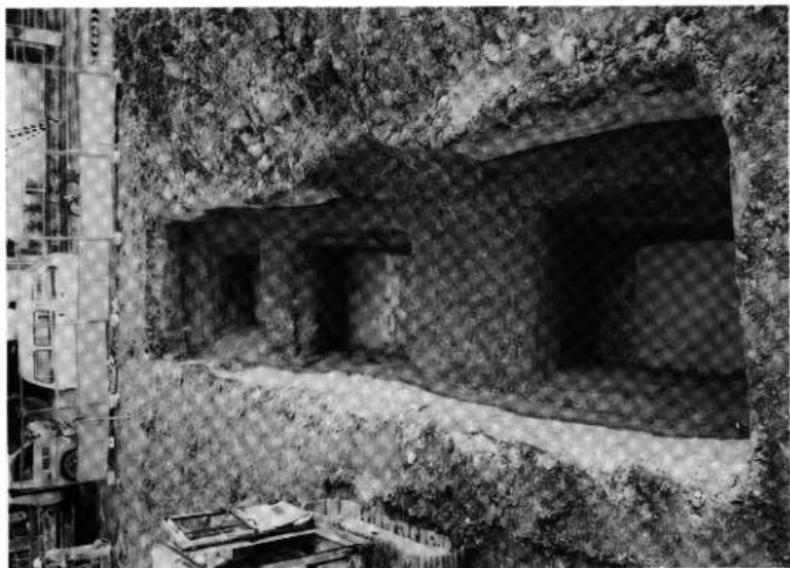
今回の調査では、遺構は検出されなかったが第4層で奈良時代、第7層で古墳時代後期の遺物を包含する土層を確認した。第4層については、当調査地の西100m地点で実施した調査で、飛鳥・白鳳時代の遺構を検出した面に対応する土層であるが、この時期に比定される遺物は上層の第3層を含めて少量であった。一方、第7層についても既往調査で確認された土層と対応するもので、付近には古墳時代後期の遺構が存在した可能性が高い。

註記

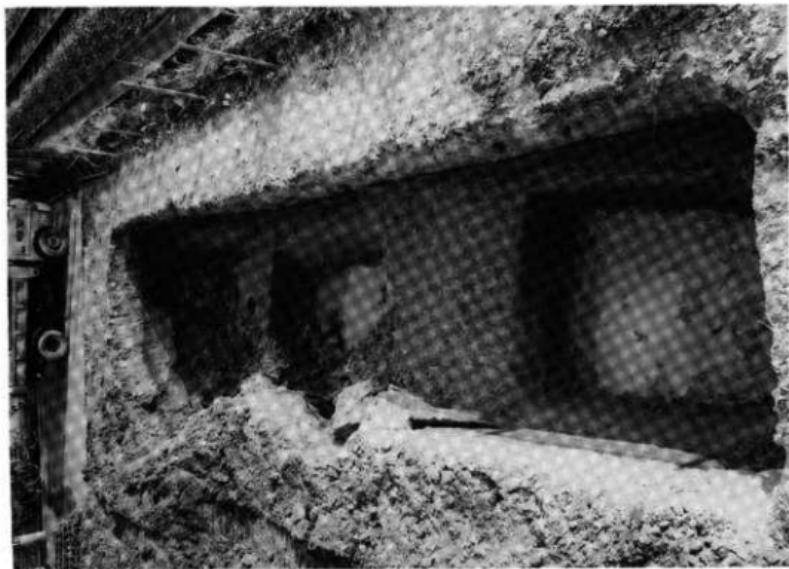
註1 (財)八尾市文化財調査研究会「平成2年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」1991

4出土遺物観察表

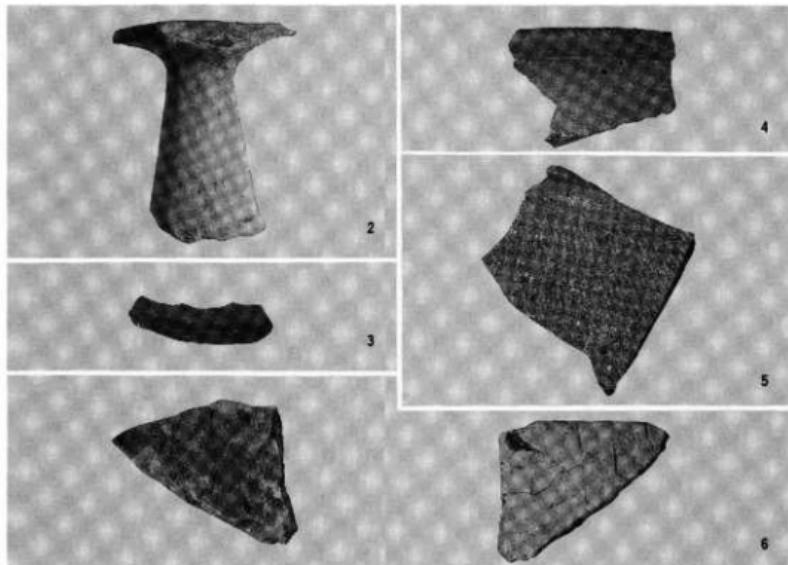
遺物番号 回収番号	器種 (cm)	口径 法量	口徑 器高	成形 調整技法	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
1 二	土師器 中盤	—	15.6	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡灰茶色	密	良好	6グリッド 4層1/6
2 二	土師器 高盤	—	—	マキアゲ成形。柱状部外面側位のハラナデ。柱状部内面シボリ日。杯部内面ナデ。	淡灰灰色	稀良 赤色陳化上 緑を極少量 含む	良好	2グリッド 7層
3 二	須恵器 舟身	—	—	マキアゲ・ミズビキ成形。受部内外面回転 ナデ。体部外面回転ヘラケズリ。	灰青色	密	堅緻	6グリッド 7層
4 二	須恵器 広口壺	—	22.8	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部折返し 縁。口縁部内外側回転ナデ。口縁部内面底か ぶり。	灰白色	密	堅緻	2グリッド 7層 L1堆積1/6
5 二	須恵器 要	—	—	マキアゲ・ミズビキ成形。縁部内外面回転 ナデ。体部外側タタキ。体部内面ナデ。	灰青色	密 黒色粒が數 見される	堅緻	3グリッド 7層
6 二	平瓦	—	—	門面一組かい赤目。凸面・斜格子タタキ。	棕灰色	やや粗 良石・石英 ・ナメル ・褐色帶化 土斑を含む	良好	2グリッド 4層



北トレンチ全景(西から)



南トレンチ全景(西から)



包含層（2～6）出土遺物

III 萱振遺跡 (K F 90-9)

例　　言

1. 本書は、八尾市幸町3丁目83で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査報告である。
1. 本書で報告する萱振遺跡第9次調査（K F 90-9）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市長山脇悦司から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成2年11月5日～平成2年11月15日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積80m²を測る。なお、調査においては真柄竜・垣内洋平が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後実施し平成3年7月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測一山内千恵子・宮崎寛子の他は原田が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

目　　次

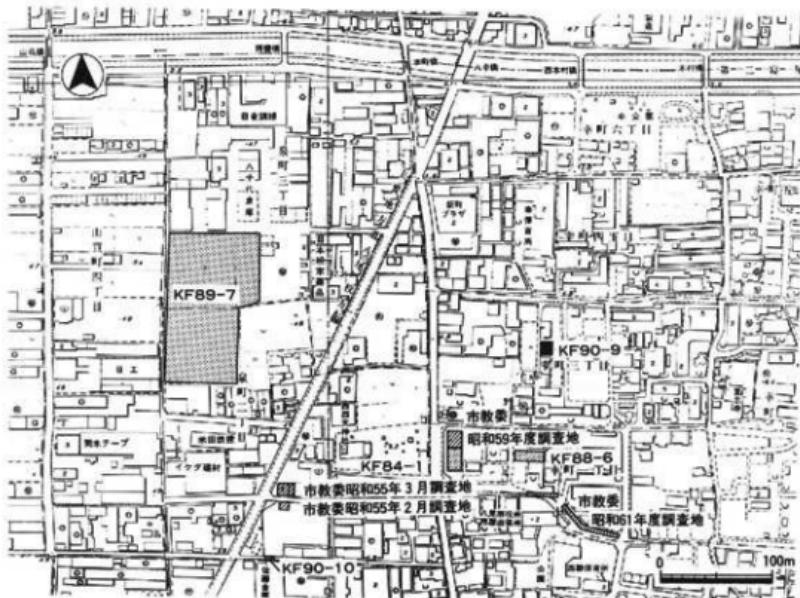
1	はじめ	13
2	調査概要	14
1)	調査方法と経過	14
2)	基本層序	14
3)	検出遺構・出土遺物	14
3	まとめ	16
4	出土遺物観察表	17

III 萱振遺跡第9次調査 (KF90-9)

1 はじめに

萱振遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川の右岸一帯に広がる低位沖積地に位置する弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾市の中央部から北部の旭ヶ丘5丁目、緑ヶ丘1~3丁目、萱振町1~7丁目、北本町3・4丁目、楠根町1・4丁目、柱町1・2丁目、幸町1・3・4・6丁目、泉町1~3丁目の東西0.9km南北1.9kmがその範囲とされている。

今回の調査地点である八尾市幸町3丁目83は遺跡範囲の北部にあたり、調査地点の南西および南約150m地点では、(財)八尾市文化財調査研究会が昭和59年度に第1次調査 (KF84-1) 昭和63年度に第6次調査 (KF88-6) を実施しており弥生時代後期から鎌倉時代に至る遺構・遺物が検出されている。今回の発掘調査は、八尾市教育委員会が平成2年8月29日に実施された遺構確認調査で、弥生時代後期から中世に至る遺物包含層を検出したことから、発掘調



第1図 調査地周辺図

査を実施するに至ったもので、事業者と八尾市教育委員会文化財室・(財)八尾市文化財調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき(財)八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施した発掘調査である。現地発掘調査の期間は平成2年11月5日～11月15日で、調査面積は80m²を測る。

2 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅の浄化槽建設に伴うもので、浄化槽設置部分の12×12mを調査対象とした。

掘削に際しては、表土下1.6mまでを機械により掘削した後、以下0.4mについては層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に務めた。その結果、表土下2m前後(標高3.2m前後)に存在する第6層上面で、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される土坑3基(SK-1～SK-3)、溝3条(SD-1～SD-3)を検出した。遺物は遺構内および第5層からコンテナ箱程度出土している。

2) 基本層序

第0層 盛土。層厚1m前後。上面の標高はT.P.

+5m前後。

第1層 旧耕土。5B4/1暗灰色粘土。層厚0.15m前後。

T.P.+5.00m

第2層 10B G5/1青灰色粘土。層厚0.25m～0.4m。

4.00m

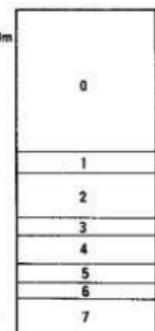
第3層 10B G4/1暗青灰色粘質土。層厚0.05m～0.15m。

第4層 10Y R5/4にぶい黄褐色砂質土。層厚0.2～0.3m。

3.00m

第5層 10Y R4/1褐灰色粘質土。層厚0.1～1.15m。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を含む。



遺構検出面

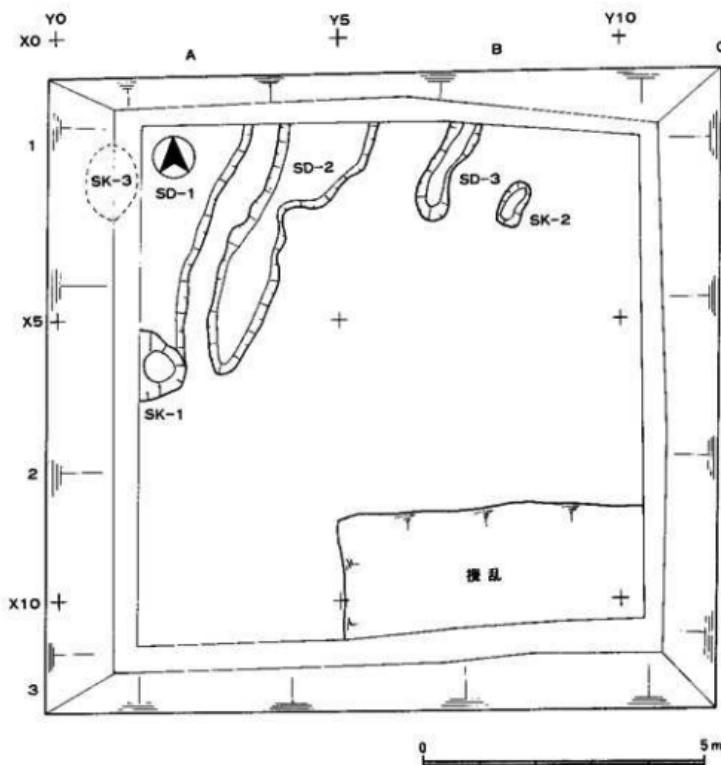
図2 図 基本層序模式図

第6層 10B G7/1明青灰色シルト混じり粘土。層厚0.1～0.25m。上面が遺構検出面である。
第7層 5B G7/1明青灰色シルト。層厚0.25m前後。

3) 検出遺構・出土遺物

土坑(SK)

SK-1



第3図 検出遺構平面図

調査区の西部で検出した。SD-1の南端を切っている。西部が調査区外のため全容は不明であるが、検出部の形状は半円形を呈する。南北幅1.18m、深さ0.23mを測る。埋土は上層から第1層灰褐色粘質土・第2層灰色粘土である。遺物は第2層から弥生時代後期～古墳時代前期に比定される壺の細片（2～4）が極少量出土した。

SK-2

調査区の北東部で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、長径0.8m、短径0.4m、深さ、0.14mを測る。埋土は上層から第1層褐灰色粘土・第2層明緑灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

SK-3

調査区北西部の西壁で検出した。平面の形状は不明であるが、検出部分の断面形状は逆円錐状を呈し、幅1.25m、深さ0.64mを測る。埋土は上層から第1層灰色シルト混じり粘土・第2層暗灰色粘土・第3層灰色シルト混じり粘土・第4層灰色粘土と明緑灰色シルトの互層である。遺物は第1層から弥生時代後期に比定される直口壺(1)・壺等の細片が少量出土した。

SD-1

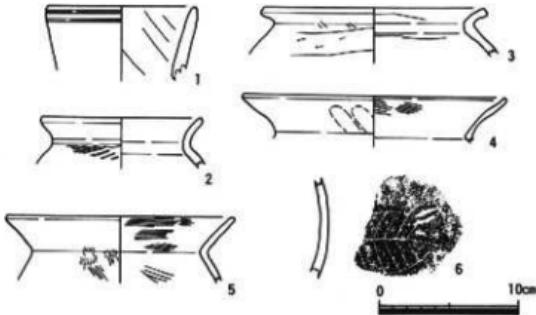
調査区の北西部で検出した。南北方向に伸びるが、西肩は調査区外のため不明である。南端はSK-1に切られている。検出長4.8m、幅1.6m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰色粘質土層である。遺物は弥生時代後期に比定される壺の細片が極少量出土した。

SD-2

SD-1の東側で検出した。南西—北東方向に伸びるもので、検出長4.7m、幅0.55m～1.8m、深さ0.1m前後を測る。埋土は褐灰色粘質土層である。遺物は弥生時代後期に比定される壺の細片が極少量出土した。

SD-3

SD-2の東側で検出した。南西—北東方向に伸びるもので、検出長1.8m、幅0.45m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰色粘質土層である。遺物は土器の細片が極少量出土したが時期は明確でない。



第4図 SK-1(2~4), SK-3(1), 第5層(5・6)出土遺物

3まとめ

今回の調査では弥生時代後期と古墳時代前期の遺構・遺物を検出した。弥生時代後期の遺構には、調査区北西部の西壁で検出したSK-3とSD-1がある。同時期に比定される遺構が、調査地の南西および南約150m地点で実施された第1次調査(KF84-1)および第6次調査(KF88-6)で検出されており、これらの地点と有機的な関係が推定されよう。古墳時代前

期の遺構としてはSK-1を検出したが、甕の細片が極少量出土した程度で不明な点が多い。

註記

註1 (財)八尾市文化財調査研究会「I 収接A遺跡(第1次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要」昭和61年度

(財)八尾市文化財調査研究会報告13 1987

註2 (財)八尾市文化財調査研究会「I 雷雲遺跡(第6次調査:幸町1丁目60-1)」「八尾市文化財調査研究会年

報 昭和63年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告25 1989

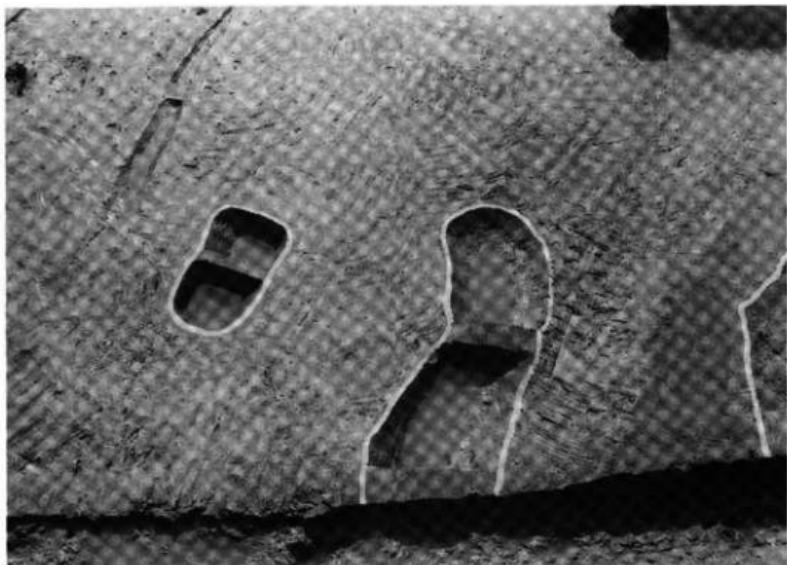
4 出土遺物観察表

遺物番号 団体名	器 種	體 (cm) 法量	II径 高	成形 調整 技法	色 調	胎 土	焼 成	備 考 収容状況
1 二	弥生土器 直口甕	10.4 —	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面に2条の沈線が廻る。	暗茶褐色	粗 長石・石英 (0.1~1mm) を含む	良好	SK-3 LJ標示1/6
2 二	弥生土器 甕	11.2 —	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タタキ。体部内面ナデ。	茶褐色	粗 長石・石英 (0.1mm)を多 量に含む	やや少 量	SK-1 口縁部1/8
3 二	弥生土器 甕	15.6 —	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	灰褐色	粗 長石・角閃石 (0.1~0.5mm) を多量に含む	良好	SK-1 口縁部1/8
4 二	上部器 甕	18.6 —	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面擦痕有。	茶褐色	粗 長石・角閃石 (0.1~1mm) を多量に含む	良好	SK-1 口縁部1/8
5 二	土器器 甕?	16.0 —	—	マキアゲ成形。口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面擦痕のハケナデ。体部外表面のハケナデ。体部内面ナデ一部ハケ状工具による仕 事が遺存。	淡褐色	粗良	良好	西壁 5層 口縁部1/6
6 二	土器器 甕?	— —	—	マキアゲ成形。体部外面ナデの後、木薙文をヘラ先状の工具で捺削している。体部内面ハケナデ。	内-深灰黑色 外-淡灰茶色	密	良好	1 A・B 5層

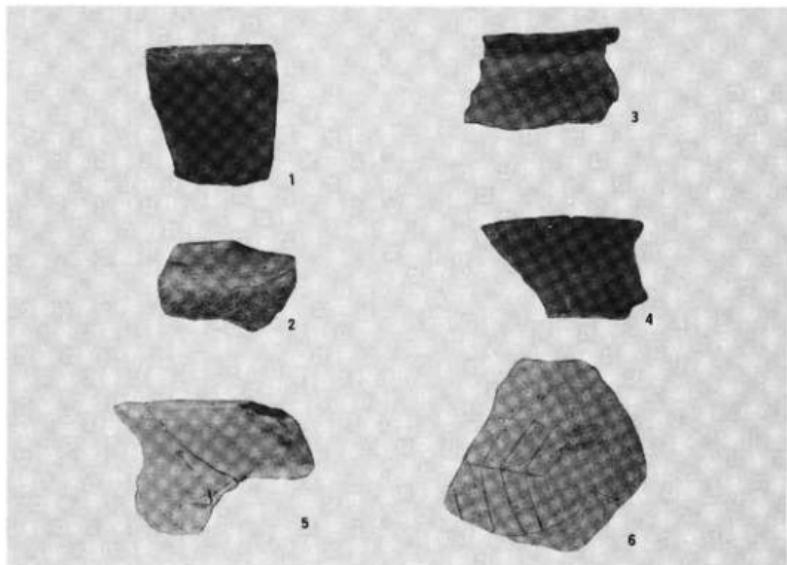




調査区全景（東から）



SK-2・SD-3 検出状況（東から）



SK-3 (1) · SK-2 (2~4) · 包含層出土遺物 (5·6)

IV 萱振遺跡 (K F 90-10)

例　　言

1. 本書は、八尾市泉町1丁目23～1丁目2で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する壹振遺跡第10次調査（K F 90-10）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成2年11月10日～11月30日にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は6.75m²を測る。
1. 本書に関わる業務は、高萩が担当した。

本　文　目　次

1.はじめに	19
2.調査概要	20
3.まとめ	20

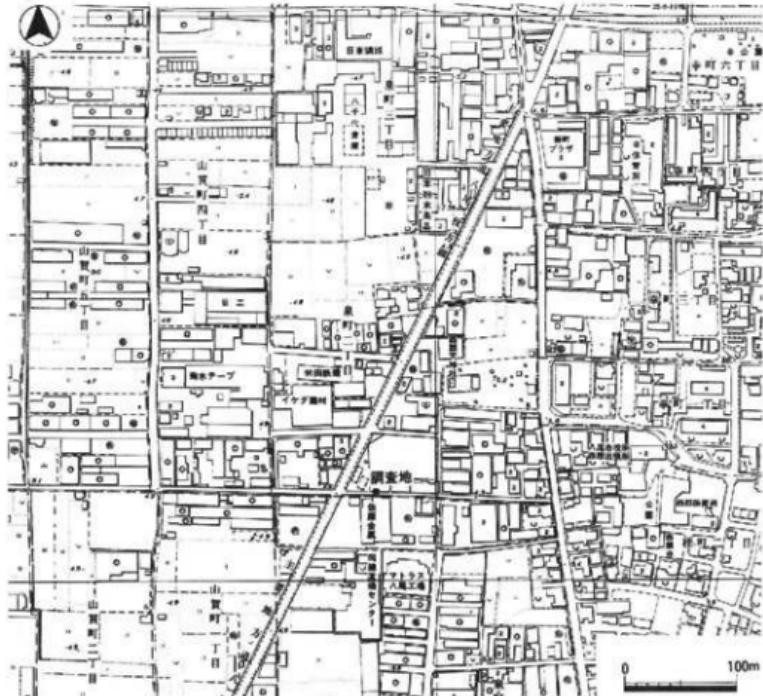
IV 萱振遺跡 (K F90-10)

1. はじめに

萱振遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川の右岸にあたる沖積地に位置しており、現在の行政区画では、緑ヶ丘・萱振町・泉町・桂町・幸町に所在している。

今回の調査地は、当遺跡北部にあたる泉町1丁目の道路下で、西郡天神社から南西100mに位置する。発掘調査は八尾市公共下水道工事に伴うもので、八尾市教育委員会の指示に基づき、当調査研究会が事業者と協定書を締結して調査を実施した。調査期間は平成2年11月10日～11月30日である。調査面積は6.75m²を測る。

調査地の周辺では大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会がそれぞれ調査主体となり発掘調査を実施しており、その調査成果から弥生時代中期～鎌倉時代に至る遺構・遺物を検出している。今回の調査は、当遺跡内で当調査研究会が実施した第10次調査にあたる。



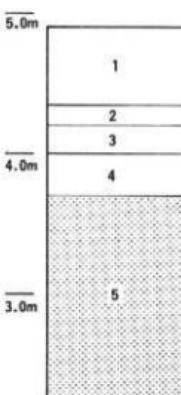
第1図 調査地位図

2. 調査概要

調査にあたっては、立坑部分（約31m²）の北側に幅1.5m、長さ4.5mのトレーナーを設定し、調査を実施した。

調査区は天神社の南西に隣接しており、西郡廃寺に関連する遺構が予測されたので機械掘削（約1m）及び人力掘削（約1m）を慎重に実施した。その結果、現地表下1m（T.P.4.2m）から約3m以下まで砂層を基調とした自然河川の堆積を確認した。

調査区の基本土層は、第1層：盛土（層厚80cm）、道路のアスファルト及び盛り土。第2層：旧耕土（層厚15cm）、第3層：床土（層厚20cm）、第4層：灰青色細砂混シルト（層厚30~40cm）、第5層：淡灰色細砂（層厚2m以上）である。第4層以下は自然河川の堆積土で、第4層には植物遺体が沈没している。



第2図 調査区基本層序柱状図

3. まとめ

今回の調査地周辺は、西郡廃寺の推定範囲と考えられている天神社に隣接しており、それらに関連する遺構の一部が存在するものと思われたが、調査の結果では自然河川の堆積土内を調査したかたちとなった。この河川は調査区が小面積であり、全容を確認することはできなかった。また、堆積土内から遺物が出土されなかっことから埋没した時期についても不明である。

V 東弓削遺跡 (HY90-5)

例　　言

1. 本書は、八尾市八尾木東1丁目94番地で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する東弓削遺跡第5次調査（H Y90-5）の発掘調査業務は、財團法人八尾市文化財調査研究会が平見一雄氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成2年11月19日～平成2年12月6日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は50m²を測る。なお、調査においては真柄竜・垣内洋平が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後実施し平成3年7月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－田島和恵、その他は原田が実施した。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

目　　次

1.はじめ	21
2.調査概要	22
1) 調査方法と経過	22
2) 基本層序	22
3) 検出遺構・出土遺物	23
3.まとめ	26
4.出土遺物観察表	27

V 東弓削遺跡第5次調査（H.Y.90-5）

1 はじめに

東弓削遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の玉串川に挟まれた低位沖積地に位置する弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾市の南部の八尾木1～6丁目、八尾木東1～3丁目、八尾木、刑部、都塚、東弓削、東弓削1～3丁目がその範囲とされている。

今回の調査地点である八尾市八尾木東1丁目94は遺跡範囲の北端に位置し、調査地点の北側は道路を挟んで中田遺跡とされている。この付近一帯では、昭和59年度以降大阪府教育委員会八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会により数次にわたる発掘調査が実施されており、弥生時代中期と古墳時代前期の遺構・遺物が検出されている。

今回の発掘調査は、八尾市教育委員会文化財室が平成2年4月27日に実施された遺構確認調査



第1圖 地圖測量

査で、弥生時代中期から中世に至る遺物包含層を検出したことから、発掘調査を実施するに至ったもので、事業者と八尾市教育委員会文化財室・(財)八尾市文化財調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき(財)八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施した発掘調査である。現地発掘調査の期間は平成2年11月19日～12月6日で、調査面積は50m²を測る。

2 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅の建設に伴うもので、建物の基礎部分を調査対象とした。調査では基礎部分に合わせて南北方向にトレンチ2本(東トレンチ3×29m・西トレンチ3×30m)を設定した。両トレンチともに、機械により表土下1.6m前後を掘削した後、基礎部分に合わせて2×2.5mのグリッドを10ヶ所(西トレンチー第1グリッド～第5グリッド、東トレンチー第6グリッド～第10グリッド)を設定した。グリッド内は層理に従って人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に務めた。その結果、表土下2.2m前後(標高9.4m前後)付近に存在する第7層上面で古墳時代前期～中期に比定される遺構を検出した。検出した遺構は第3グリッドー土坑1基(SK-1)、第4グリッドー土坑2基(SK-2・SK-3)・小穴1個(SP-1)、第5グリッドー土坑1基(SK-4)、第9グリッドー溝1条(SD-1)、第10グリッドー土坑2基(SK-5・SK-6)である。

遺物は遺構内および第4層・第6層・第7層からコンテナ箱に4箱程度出土している。

2) 基本層序

第0層 盛土。層厚1.2～1.5m。上面の標高は

T.P.+11.5m前後。

第1層 黒灰色砂質土。旧耕上。層厚0.15m前後。

西トレンチには存在しない。

第2層 明緑灰色砂質土。粘土。層厚0.2m前後。

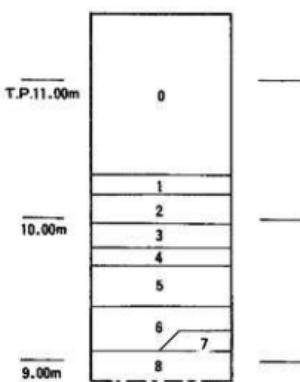
第3層 灰白～明黄褐色細砂。層厚0.2m前後。

第4層 青灰色砂質土。層厚0.1～0.2m。中世の遺物を含む。

第5層 灰白色粘土。層厚0.1～0.3m。調査地の南部では存在しない。

第6層 暗青灰色砂質土。層厚0.1～0.3m。古墳時代前期～中期の遺物を含む。

第7層 青灰色砂質シルト。層厚0.1～0.2m。古



第2図 基本層序模式図

墳時代前期と中期の遺構検出面。

第8層 明黄褐色細砂。層厚1m以上。河川跡。

3) 検出遺構・出土遺物

土坑 (SK)

SK-1

第3グリッドの南西部で検出した。大半が調査区外のため全容は不明である。深さは0.5mを測る。埋土は上層から暗青灰色砂質土・灰白色細砂～中砂・青灰色細砂である。遺物は出土しなかった。

SK-2

第4グリッドの西部で検出した。上面の形状が楕円形を呈する。東西幅0.6m、南北幅0.8m、深さ0.24mを測る。埋土は上層から褐灰色砂質土・暗青灰色粘質土である。遺物は古墳時代中期に比定される土師器・須恵器の細片が少量出土している。

SK-3

第4グリッド南東隅で検出した。東部が調査区外のため全容は不明である。南北幅0.5m、深さ0.22mを測る。埋土は暗青灰色砂質土である。遺物は古墳時代前期に比定される土師器の細片が極少量出土している。

SK-4

第5グリッドの南東隅で検出した。東部および南部が調査区外のため全容は不明である。深さは0.3mを測る。埋土は暗青灰白色砂質土である。古墳時代前期に比定される土師器の細片が極少量出土した。

SK-5

第10グリッドの北東隅で検出した。大半が調査区外のため全容は不明である。深さ0.4m以上。埋土は暗青灰色砂質土である。

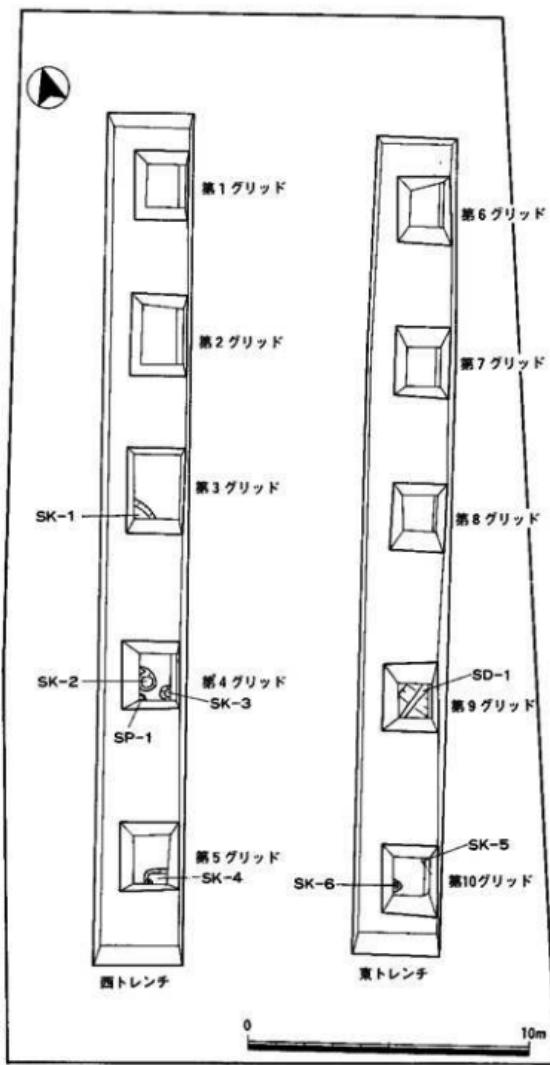
SK-6

第10グリッドの南西部で検出した。西部は調査区外のため全容は不明である。南北幅0.9m、深さ0.16mを測る。埋土は青灰色砂質土である。

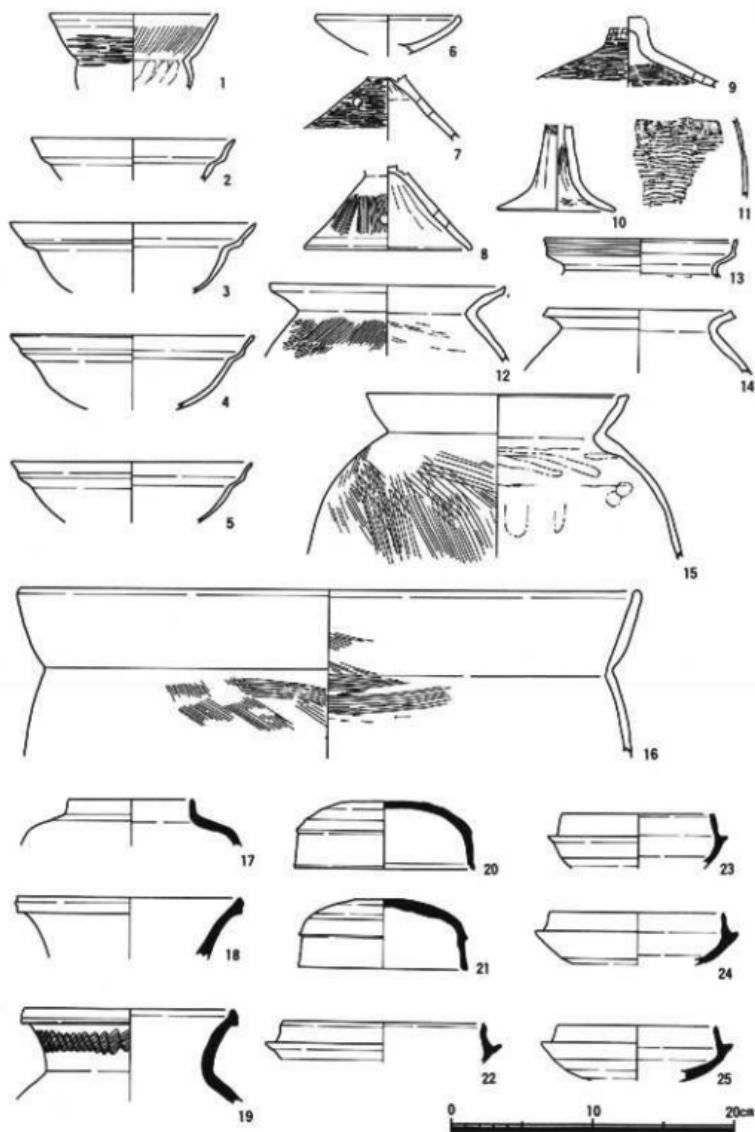
溝 (SD)

SD-1

第9グリッドで検出した。北東～南西方向に伸びるもので、幅1.1m、深さ0.16mを測る。埋土は青灰色砂質土・暗青灰色砂質土である。遺物は古墳時代前期に比定される高杯(9)大型鉢(T6)が出土している。



第3図 検出構造平面図



第4図 出土遺物実測図

小穴 (S P)

S P - 1

第4グリッド南西で検出した。大半が調査区外のため全容は不明である。深さ0.22mを測る。埋土は暗青灰色砂質土である。遺物は古墳時代中期に比定される土器類が極少量出土している。

3 まとめ

今回の調査は部分的な調査ではあったが、調査地の南部を中心として古墳時代前期（庄内式新相～布留式古相）と古墳時代中期に比定される遺構を検出した。古墳時代前期（庄内式新相～布留式古相）の遺構としては、調査地の西約270m地点の八尾木4丁目1、南西約170m地点の八尾木4丁目5^{註1}、北西約80m地点の八尾木北6丁目166^{註2}で検出されており、この時期の集落が広範囲に広がっていることが明らかになった。また、古墳時代中期については、調査地の西約120m地点の八尾木東1丁目の調査で同時期の包含層が確認されており、両者間の有機的な関係が推定できよう。一方、第6層からは古墳時代前期～中期に比定される土器類の細片が多量に出土しており、層相からみて整地層である可能性が高い。調査地一帯は「西の京」の推定地内であり、これらの上層の存在については、今後注意を払う必要があろう。第8層は河川跡と推定される粗砂を主体とする土層で、調査区の全域で1m以上堆積していることが確認された。これらの上層は、調査地の東120mで行われた発掘調査^{註3}でも検出されており、東西方向に走る河川であったことが窺われる。なお、試掘調査では、この土層から弥生時代中期に比定される壺の破片が出土している。

註記

- 註1 (財)八尾市文化財調査研究会「8中田遺跡（八尾木地区）『昭和58年度事業報告』1984
- 註2 八尾市教育委員会「中田遺跡発掘調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』1987
- 註3 八尾市教育委員会「8中田遺跡（85-532）『八尾市内昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ』1988
- 註4 (財)八尾市文化財調査研究会「10東弓削遺跡（第4次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』
- 註5 八尾市教育委員会「東弓削遺跡」1976

4 出土遺物觀察表

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 保存状況
1 三	土器 小型丸底盆	11.8 —	マキアゲ成形。口縁部内面横位の密なヘラミガキの後、放射状ヘラミガキ。口縁部外周横位の密なヘラミガキ。体部内外面ナダ。	淡茶灰色	精良	良好	6グリッド 6層 1/4
2	土器 小型丸底盆	14.4 —	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナダ。体部内外面ナダ。	内一茶灰色 外一灰褐色	精良	良好	2グリッド 6層 1/8
3	土器 小型丸底盆	17.4 —	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナダ。体部内面ナダ。体部外周表面剥離のため調整不明。	淡褐色	精良 赤色化上 糞を含む	良好	8グリッド 6層 1/6
4 三	土器 小型丸底盆	17.2 —	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナダ。体部内外面ナダ。	内一淡茶色 外一暗茶色 (0.1~1mm) を多量に含む	やや粗 妙粒	良好	2グリッド 6層 1/4
5 三	土器 小型丸底盆	17.0 —	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナダ。体部内面ナダ。体部外周上段ナダ、下段ヘラケ ズリ。	内一乳灰色 外一灰褐色	精良	良好	6グリッド 6層 1/6
6	土器 小型器台	— 受部径10.1	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナダ。体部内外面ナダ。	乳白色	精良	良好	9グリッド 6層 受部1/2
7	土器 小型器台	—	マキアゲ成形。脚部内面ナダ。脚部外周横位の密なヘラミガキ。スカシ孔は3個。	赤茶色	精良	良好	8グリッド 6層
8 三	土器 小型器台	— 脚部径11.8 脚部高6.0	マキアゲ成形。脚部内面ナダ。脚部内面上位シリ目。脚部端内外面ヨコナダ。脚部外 面ハケナダ。受部内面ナダ。スカシ孔は4個。	乳白色	密	良好	9グリッド 6層 脚部完存
9 三	土器 高杯	—	マキアゲ成形。柱状部外周ハラナデの後、密なヘラミガキ。裾部外周密なヘラミガキ。 脚部内面ハケナダ。スカシ孔は4個。	淡茶色	密	良好	9グリッド SD-1
10 三	土器 高杯	— 被部径8.1 脚部高6.3	マキアゲ成形。柱状部腹位のヘラナデの後 ナダ。裾部外周ナダ。柱状部内面シリ目。 被部内面ナダ、一部ヘラク工具による压痕が 遺存。	赤茶色	やや粗 長石 (0.1~1mm) を多量に含む	良好	8グリッド 6層 脚部完存
11 三	装塗土器	—	手づくね成形。体部外周横位のタタキ。体 部内面指圧压成後ナダ。	乳白色	密 長石 (0.3mm)を 少量含む	良好	2グリッド 6層
12 三	土器 甕	16.8 —	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナダ。体 部外周右上りの施脂タタキの後ハケナデ。体 部内面ヘラケズリ。	淡茶褐色	やや粗 長石・角閃 石・黒雲母 (0.1~1mm) を多量に含む	良好	1グリッド 7層 1/6
13 三	土器 甕	13.5 —	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナダ。口 縁部外周彫刻凹線。体部内面ヘラケズリ。	淡灰色	やや粗 長石・角閃 石・黒雲母 (0.1~1mm) を多量に含む	良好	6グリッド 6層 古備系 1/6
14 三	土器 甕	13.1 —	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナダ。体 部内外面ナダ。	淡茶褐色	やや粗 長石・石英 (1mm)微見 する	良好	1グリッド 7層 1/6

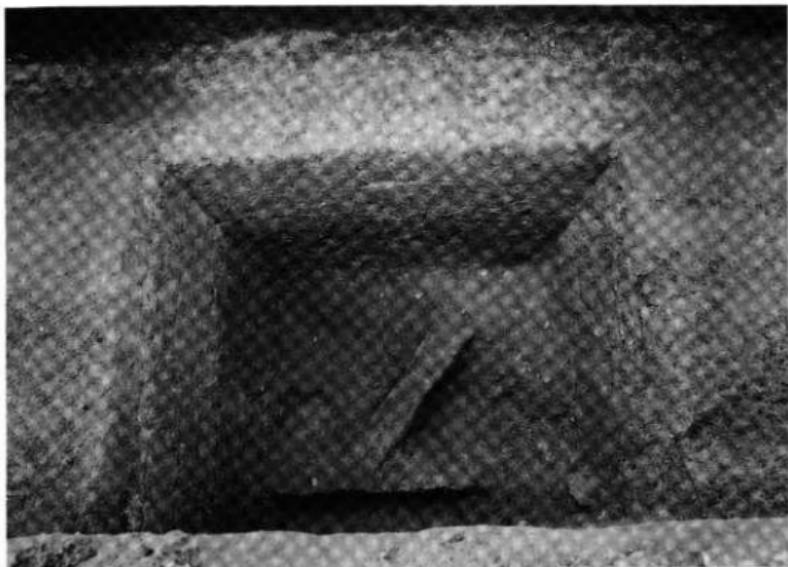
遺物番号 四版番号	器種	(cm) 法量	L1径 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
15 四	上膳器 支	18.6	—	マキアゲ成形。L1縫部内外面ヨコナダ。体部外面左上りの無いバケナダ。体部内面指痕压痕形後ナダ。	褐色	やや粗 長石・石英 ・黒雲母 (0.1~1mm) を多量に含む	良好	4グリッド 6層 L1縫部1/2 以上
16 四	土器鉢	44.4	—	マキアゲ成形。口縫部内外面ヨコナダ。体部外縫横位のハケナダ。体部内面L1縫横位のハケナダ。他はヘラケズリ。	乳灰色	粗 長石・石英 ・角閃石 (0.1~3mm) を多量に含む	良好	9グリッド SD-1 1/8
17 四	須恵器 有蓋短頭壺	8.6	—	マキアゲ・ミズビキ成形。L1縫部および体部内外面回転ナダ。体部外側灰かぶり。体部外面上位に陶片付着。	古灰色	密 黒色の砂粒 を多量に含む	堅微	8グリッド 6層 1/4
18 四	須恵器 壺	15.9	—	マキアゲ・ミズビキ成形。口縫部内外面回転ナダ。L1縫部内面および口縫部外側灰かぶりの付着。	古灰色	密	堅微	6グリッド 6層 1/4
19 四	須恵器 壺	14.9	—	マキアゲ・ミズビキ成形。口縫部内外面回転ナダ。新部外側波状文(1条に12本)。体部内外面回転ナダ。	青灰色	粗 長石 (0.1~2mm) を多量に含む	堅微	2グリッド 6層 1/6
20 四	須恵器 杯壺	12.6 4.8	—	マキアゲ・ミズビキ成形。縁より0.8cm以上回転ヘラケズリ。L1縫部内外面回転ナダ。大井部内面ナダ。	灰青色	やや粗 長石 (0.1~3mm) を散見する	堅微	2グリッド 6層 1/4
21 四	須恵器 杯壺	11.8 5.0	—	マキアゲ・ミズビキ成形。縁より0.8cm以上回転ヘラケズリ。L1縫部内外面回転ナダ。天井部内面ナダ。天井部外側灰かぶり。	内-青灰色 外-灰色	密	堅微	2グリッド 6層 1/2
22 四	須恵器 杯身	14.2	—	マキアゲ・ミズビキ成形。立ち上がり部内外面回転ナダ。底体部内外面回転ナダ。	青灰色	密	堅微	2グリッド 6層 1/6
23 四	須恵器 杯身	10.8	—	マキアゲ・ミズビキ成形。立ち上がり部内外面回転ナダ。底体部内外面回転ナダ。	淡灰色	粗 砂粒 (0.1mm) を多量に含む	堅微	5グリッド 4層 1/4
24 四	須恵器 杯身	12.2 3.8	—	マキアゲ・ミズビキ成形。立ち上がり部内外面回転ナダ。受部より2cm底回転ナダ。以下回転ヘラケズリ。	淡灰色	やや粗 砂粒 (0.1mm) を多量に含む	堅微	5グリッド 4層 1/4
25 四	須恵器 杯身	11.2 4.0	—	マキアゲ・ミズビキ成形。立ち上がり部内外面回転ナダ。受部より0.8cm底回転ナダ。以下回転ヘラケズリ。底体部内面ナダ。	淡青灰色	密	堅微	5グリッド 7層 1/4



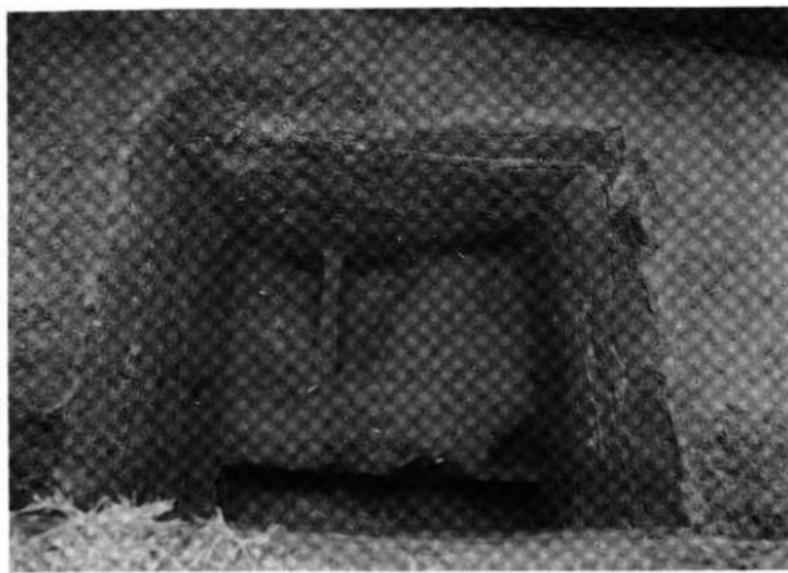
西トレンチ全景（北から）



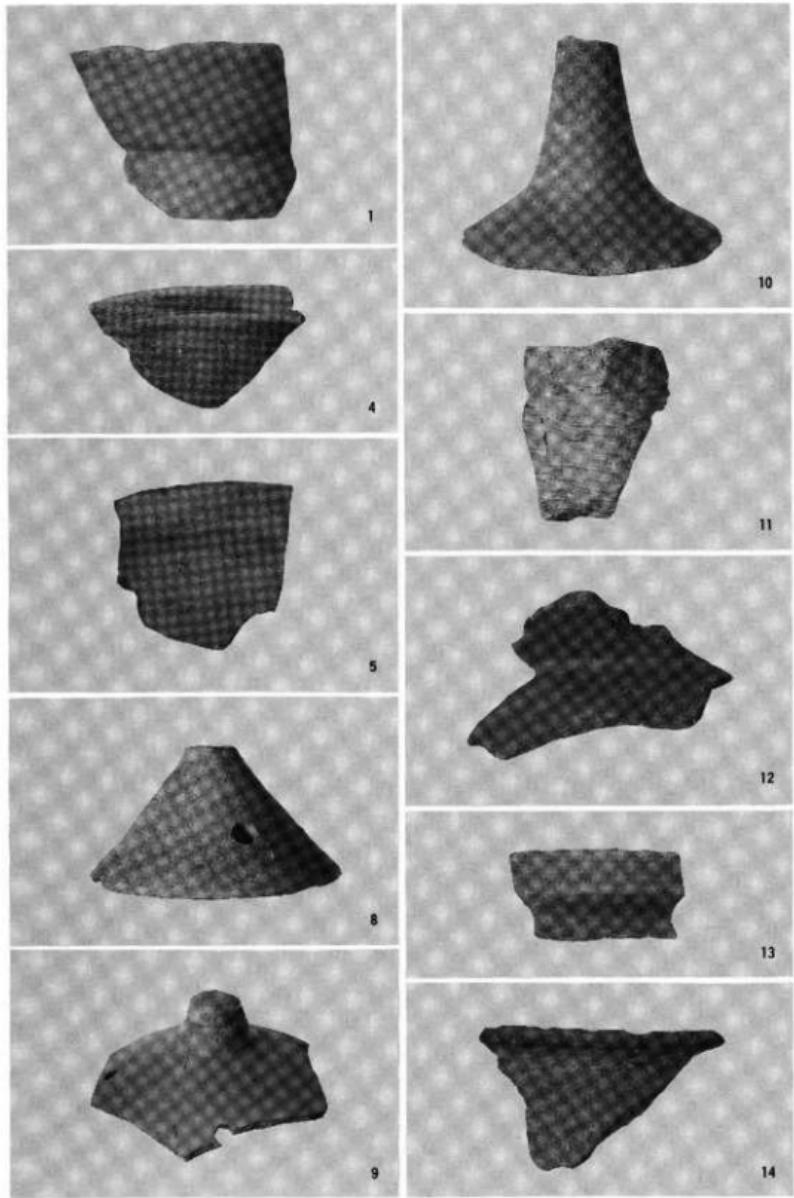
東トレンチ全景（南から）



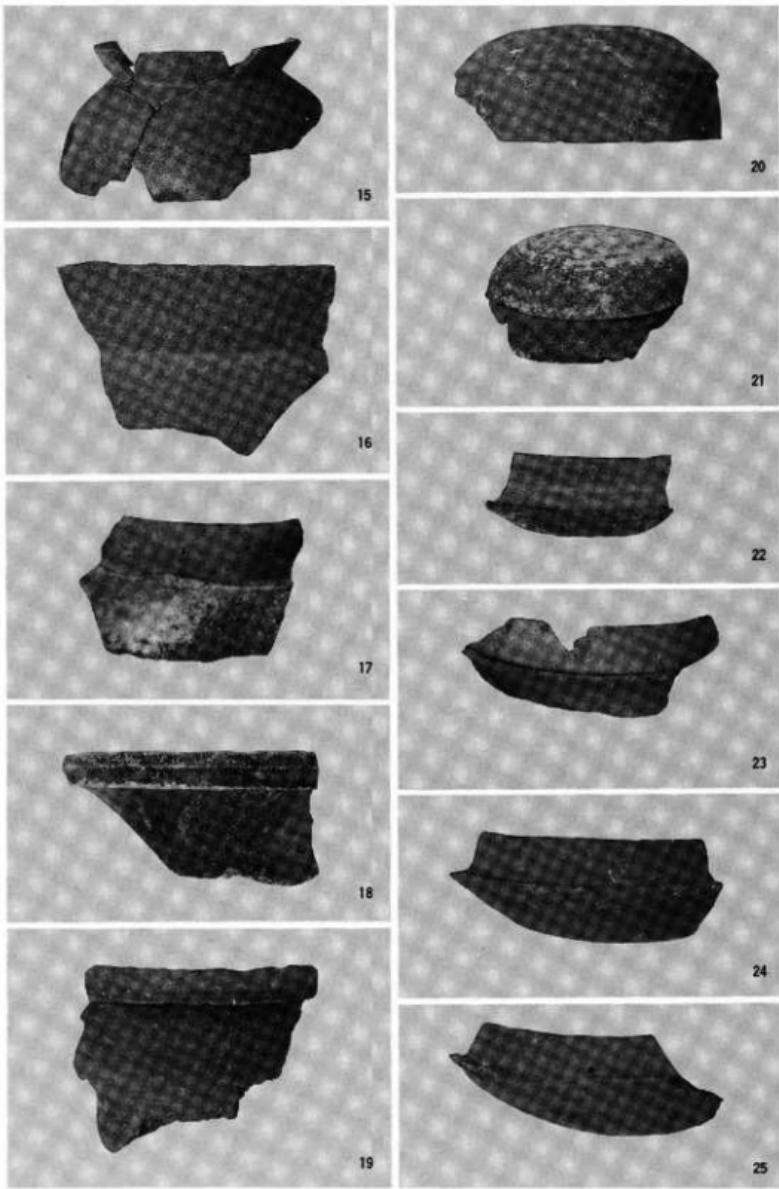
第9グリット全景（東から）



第10グリット全景（東から）



SD-1 (9) 包含層 (1・4・5・8・10~14) 出土遺物



包含層（15～25）出土遺物

VI 木の本遺跡 (SK90-4)

例　　言

1. 本書は、八尾市南木の本4丁目34、南木の本5丁目65で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する木の本遺跡第4次調査（SK90-4）の発掘調査業務は、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市下水道部から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成2年11月19日～平成3年11月22日、平成3年3月5日～平成3年3月11日にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は、100m²を測る。なお、調査においては、若竹慶弘が参加した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測、遺物復元－村井俊子・中西明美 図面レイアウト、トレース、遺物写真撮影－西村が行った。
1. 本書の執筆は、西村が担当した。

目　　次

1	はじめに	29
2	調査概要	30
1)	調査方法と経過	30
2)	検出遺構と出土遺物	30
3	まとめ	30
4	出土遺物観察表	34

VI 木の本遺跡 (SK90-4)

1 はじめに

木の本遺跡は、八尾市木の本付近一帯に広がる弥生時代前期から鎌倉時代に至る遺跡である。当遺跡は、河内平野を北西方向に流れている平野川の南の沖積地上に位置している。当遺跡の周辺には、西に八尾南遺跡、東に田井中遺跡、北に太子堂遺跡が存在している。

当遺跡内では、昭和55年度に八尾市教育委員会文化財室が南木の本4丁目5～9で調査を行っており、弥生時代中期から古墳時代中期に至る遺構・遺物を検出している。このほか(財)八尾市文化財調査研究会では現在までに3件の調査を実施している。第1次調査は昭和57年～58年度に八尾空港内で実施しており、弥生時代～近世に至る遺構・遺物を検出している。第2次調査は昭和57年度に南木の本1丁目61で実施しており、平安時代の遺構・遺物を検出している。第3次調査は昭和58年度に南木の本3丁目13、19-3で実施しており、古墳時代前期の掘立柱建物を検出している。

今回の発掘調査は八尾市公共下水道に伴うもので、八尾市教育委員会の指示に基づき、当調



第1図 調査地周辺図

査研究会が事業者と協定書を締結して調査を実施した。

2 調査概要

1) 調査方法と経過

下水道工事の立坑を対象に調査を実施した。調査地は2箇所であるため西側の調査地を西区・東側の調査地を東区とした。調査にあたって西区では、現地表下1.5m（標高9.1m）までの土層を機械で掘削し、以下の各層は人力で掘削を実施した。また東区では、現地表下1.9m（標高8.9m）までの土層を機械で掘削し、以下の各層は人力で掘削を実施した。調査の結果、西区では、現地表下1.9m（標高8.7m）前後に存在する第4層上面で河川1条（NR-1）を検出した。東区では、現地表下2.6m（標高8.2m）前後に存在する第3層上面で古墳時代中期の土坑1基（SK-1）と溝1条（SD-1）を検出した。

2) 検出遺構と出土遺物

西区

NR-1は南東から北西方向に伸びる河川で、調査地内では東肩を検出した。西肩は調査地外にあるため本来の幅は不明である。内部堆積土は上から暗紫灰色シルト混粘土・青灰色細砂・粗砂・シルトの互層である。出土遺物はなかった。

東区

SK-1は調査区のほぼ中央で検出した。径1.0m・深さ0.4mを測る。内部堆積土は灰色粘土で古墳時代中期の須恵器・土師器が出土した。出土遺物は、須恵器の壺（1）・杯身（2～7）・杯蓋（8～18）、土師器の壺（19・20）・甕（21・23）・高杯（24）・把手付鍋（25・26）・瓶（27・28）である。須恵器は陶邑縄年のI型式3～4段階である。

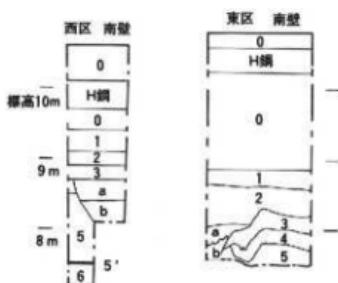
SD-1は南北方向に伸びる溝で、調査地内では西肩を検出した。東肩は調査地外にあるため本来の幅は不明である。内部堆積土は上から灰色粘土、暗灰褐色粘土（植物遺体含む）で、土師器の細片や木片が少量出土している。

このほか第4層内からは弥生時代後期の甕（29）と中期の壺（30）が出土している。

3 まとめ

西区・河川を検出した。この河川からは遺物は出土していないが、近接している昭和55年度調査の層序と照らし合わせて考えると、古墳時代後期以降のものと推定される。

東区・古墳時代中期の遺構は、昭和55年度調査で検出した遺構と同時期であることがわかった。また第4層内からは弥生時代中期～古墳時代前期にかけての遺物が少量出土しているが、その下層の第5層上面では遺構の検出および遺物の出土はなかった。



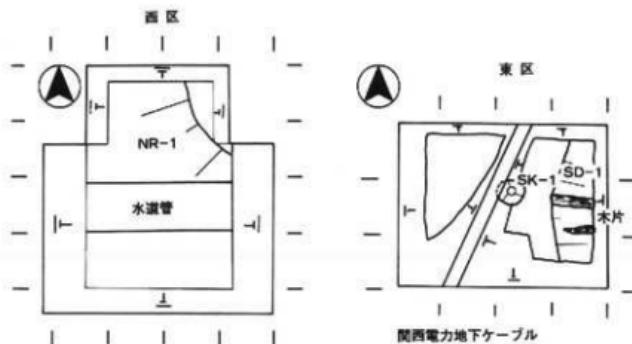
基本層序

西 区

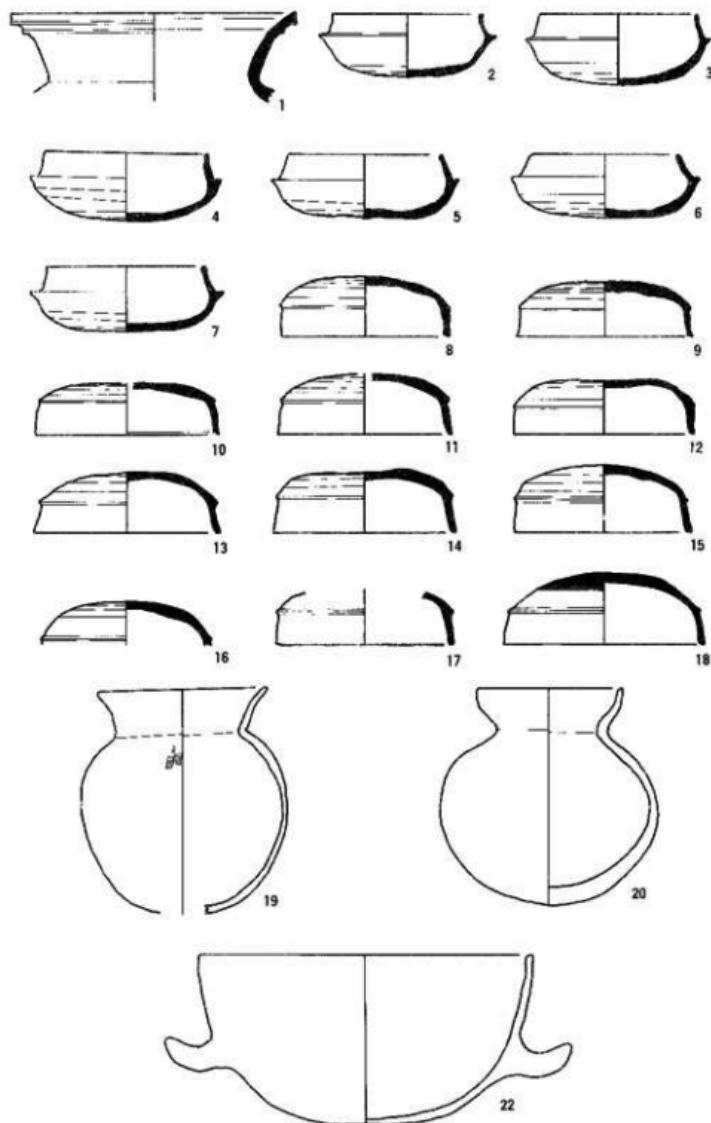
- 第0層：盛土 層厚1.2m
- 第1層：黄褐色粗砂泥粘土 层厚0.3m
- 第2層：黄褐色粘土 层厚0.2m
- 第3層：暗青灰色シルト混粘土 层厚0.2m
- 第4層：暗青灰色粘土 层厚0.2m
- 第5層：暗青灰色シルト混粘土 层厚1.0m
- 5：暗赤褐色(植物遺体) 层厚0.02m
- 第6層：青灰色シルト混粘土 层厚0.3m以上
- a：暗青灰色シルト混粘土
- b：青灰色細砂・粗砂・シルトの互層

東 区

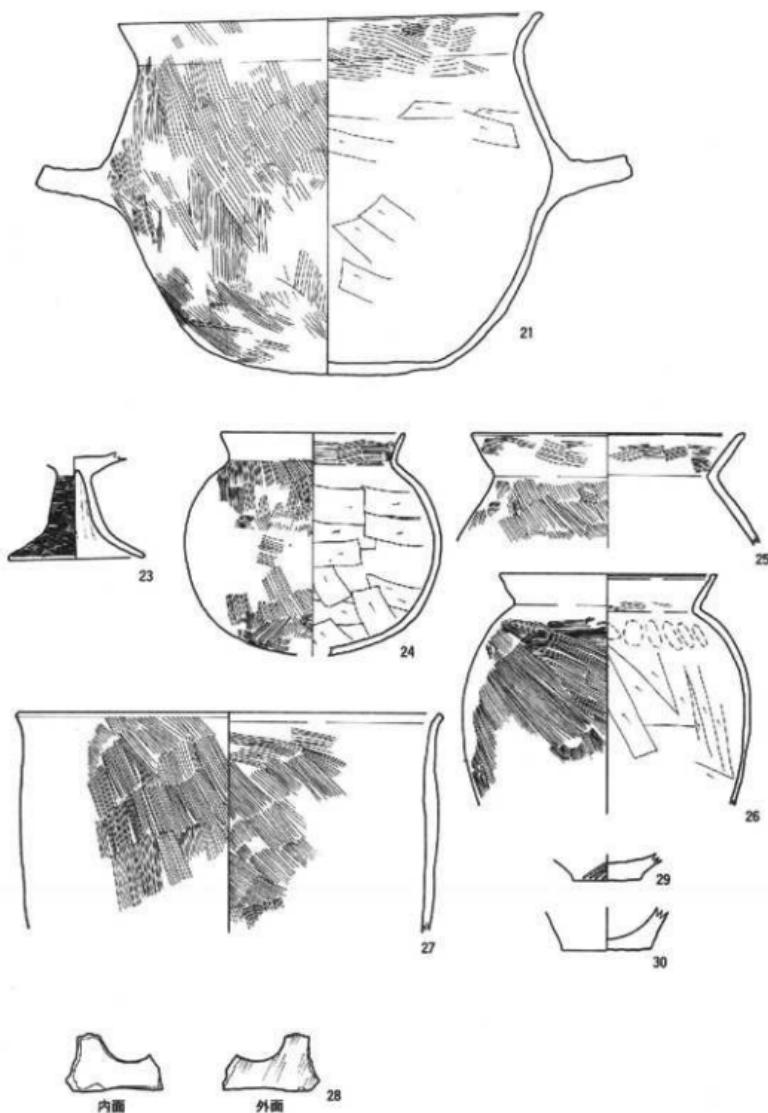
- 第0層：盛土 层厚1.9m
- 第1層：灰褐色粘土 层厚0.3m
- 第2層：灰色粘土 层厚0.5m
- 第3層：淡灰色粗砂泥粘土 层厚0.2m
- 第4層：堆灰色粗砂泥粘土 层厚0.2m
- 第5層：青灰色シルト 层厚0.3m以上
- a：灰色粘土
- b：堆灰褐色粘土(植物遺体含む)



第2図 基本層序・調査区平面図



第3図 出土遺物実測図



第4回 出土遺物実測図2

4 出土遺物観察表

SK-1

遺物番号 回収番号	移 植 山 土 地 点	(m) 地盤 標高	口径 器高	形態・病害等の特徴	色 調	胎 土	施 成	備 考
1 盃 (須恵器) SK-1		口径 20.3		口縁部外側に一条の凸縫がある。 内外面回転ナダ。	灰青色	良	良好	
2 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 10.6 器高 4.55			内面回転ナダ。外面底部回転ヘラケズリ、受 部・口縁部回転ナダ。	灰青色	良	良好	
3 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 11.2 器高 5.05			内面回転ナダ。外面底部回転ヘラケズリ、受 部・口縁部回転ナダ。	灰青色	良	良好	
4 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 11.6 器高 4.95			内面回転ナダ。外面底部回転ヘラケズリ、受 部・口縁部回転ナダ。	灰青色	良	良好	
5 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 10.9 器高 4.6			内面回転ナダ。外面底部回転ヘラケズリ、受 部・口縁部回転ナダ。	灰青色	良	良好	
6 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 10.4 器高 4.5			内面回転ナダ。外面底部回転ヘラケズリ、受 部・口縁部回転ナダ。	灰青色	良	良好	
7 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 11.2 器高 4.7			内面回転ナダ。外面底部回転ヘラケズリ、受 部・口縁部回転ナダ。	淡灰色	良	良好	
8 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 12.0 器高 4.3			内面回転ナダ。外面天井部回転ヘラケズリ、 口縁部回転ナダ。	灰色	良	良好	
9 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 12.6 器高 3.9			内面回転ナダ。外面天井部回転ヘラケズリ、 口縁部回転ナダ。	淡灰色	良	良好	
10 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 13.1 器高 3.65			内面回転ナダ。外面天井部回転ヘラケズリ、 口縁部回転ナダ。	淡灰色	良	良好	
11 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 12.8 器高 4.3			内面回転ナダ。外面天井部回転ヘラケズリ、 口縁部回転ナダ。	淡灰色	2 mm程度粉 粒合有	良好	
12 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 12.8 器高 3.9			内面回転ナダ。外面天井部回転ヘラケズリ、 口縁部回転ナダ。	淡灰色	良	良好	
13 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 13.2 器高 4.3			内面回転ナダ。外面天井部回転ヘラケズリ、 口縁部回転ナダ。	灰紫色	良	良好	
14 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 13.0 器高 4.5			内面回転ナダ。外面天井部回転ヘラケズリ、 口縁部回転ナダ。	灰色	良	良好	
15 杯 身 (須恵器) SK-1	口径 12.6 器高 4.8			内面回転ナダ。外面天井部回転ヘラケズリ、 口縁部回転ナダ。	灰色	1 mm程度粉 粒合有	良好	

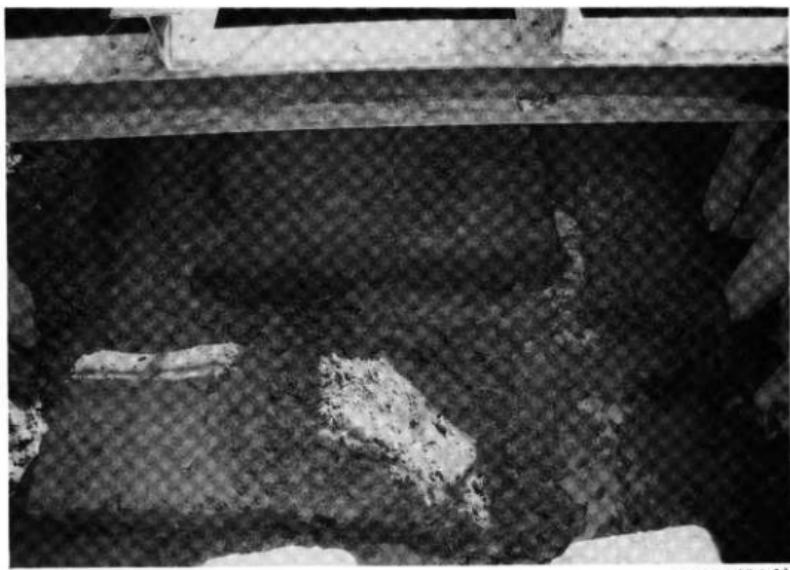
遺物番号 採取番号	器 出上地点	(cm) 口径 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	上 模 成	備 考
16 杯 盆 (頭骨器) SK-1	縦径 12.2		内面回転ナデ。外面天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ。	灰色	1~3mm程度砂粒含む	良好	
17 杯 盆 (頭骨器) SK-1	口径 12.2		内面回転ナデ。外面天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ。	淡灰色	精良	良好	
18 杯 盆 (頭骨器) SK-1	口径 14.4 器高 5.1		内面回転ナデ。外面天井部回転カキ目、口縁部回転ナデ。	灰色	1mm程度の砂粒少量化	良好	
19 壺 (土師器) SK-1	口径 12.2		体部内面ナデ、外面ハケ目。口縁部内外ヨコナデ。	茶褐色	2mm程度の砂粒多く含む	良好	
20 壺 (土師器) SK-1	口径 10.2 器高 15.5		体部内外面ナデ。口縁部内外ヨコナデ。	乳茶色	1~2mm程度の砂粒少量化	良好	
21 把手付壺 (土師器) SK-1	口径 30.1 器高 25.9		体部内面ヘラケズリ、外面ハケ目。口縁部内外ヨコナデ後ハケ目。 体部に把手が2箇所付く。口縁部に1箇所付く。	乳茶灰褐色	2mm程度の砂粒少量化	良好	
22 把手付壺 (土師器) SK-1	口径 23.6 器高 12.1		体部・口縁部内外面ナデ。 体部に把手が2箇所付く。	乳茶色	1~3mm程度の砂粒多く含む	良好	
23 高 壺 (土師器) SK-1	縦径 9.6		器内面ナデ、外面ヘラミガキ。器内面シボリ目、外面ヘラミガキ。	乳茶色	1~2mm程度の砂粒少量化	良好	
24 壺 (土師器) SK-1	口径 13.0 器高 15.8		体部内面ヘラケズリ、外面ハケ目。口縁部内外ヨコナデ後ハケ目。	淡乳茶色	1mm程度の砂粒少量化	良好	
25 壺 (土師器) SK-1	口径 19.4		体部内面ナデ、外面ハケ目。口縁部内外ヨコナデ後ハケ目。	乳赤褐色	3mm程度の砂粒少量化	良好	
26 壺 (土師器) SK-1	口径 15.5		体部内外面下半ヘラケズリ・上半ナデ、外面ハケ目。口縁部内面ヨコナデ後ハケ目、外面ヨコナデ。	淡茶色	2mm程度の砂粒少量化	良好	
27 壺 (土師器) SK-1	口径 30.0		体部内外面ハケ目。口縁部内面ヨコナデ、外面ハケ目。	茶灰褐色	1mm程度の砂粒多く含む	良好	
28 瓶 (土師器) SK-1			外面ハケ目、内面ナデ。	乳灰色	1mm程度の砂粒少量化	良好	蓋部のみ残存 焼成度に差あり

第4層 包含層

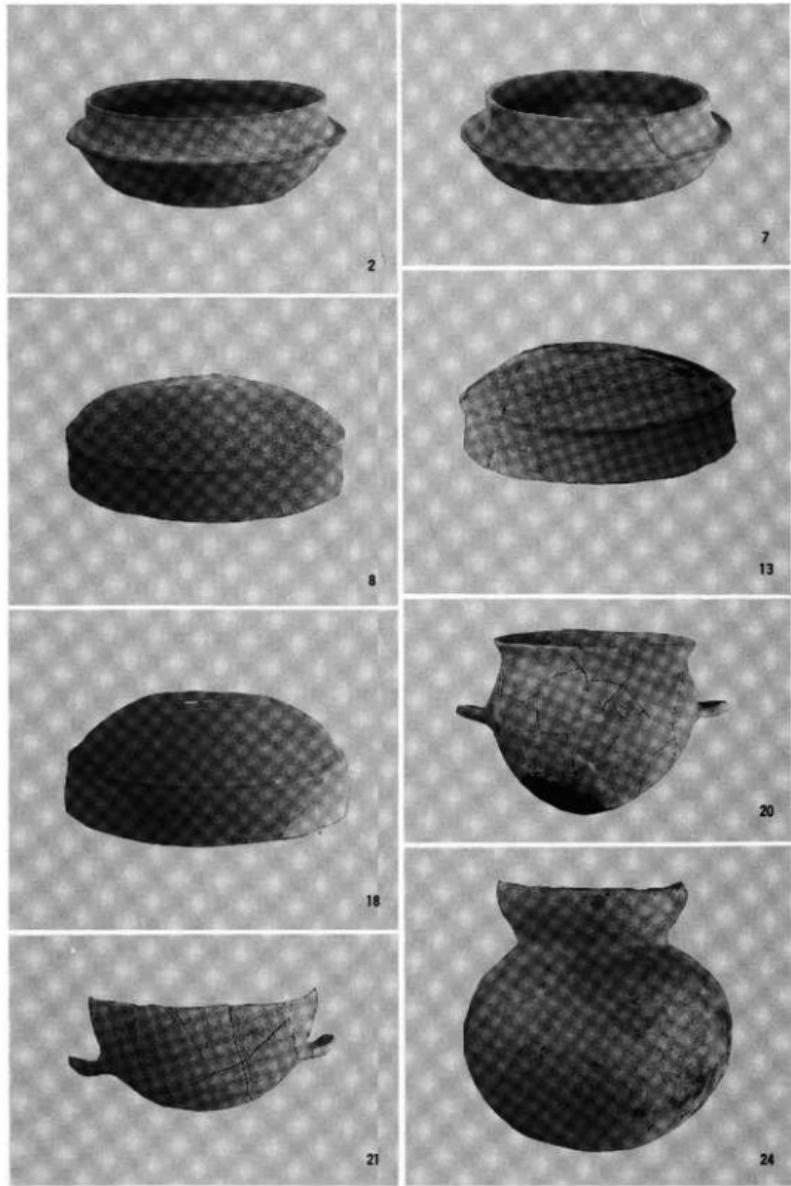
番号 同族番号	番号 出土地点	(cm) 口径 法盤	形態・調整等の特徴	色調	粘土	性質	備考
29	壳 (発生上部) 包含層	底径 4.8	外面タタキ目、内面ナゲ。	淡灰褐色	1~2mm程度の砂粒多く含む	良好	
30	壳 (発生下部) 包含層	底径 6.4	内外面ナゲ。	淡灰褐色	3mm程度の砂粒多く含む	良好	



東区全景(南から)



西区全景(北から)



(財)八尾市文化財調査研究会報告32

- | | |
|-----------------|-----------------|
| I 久宝寺遺跡（第5次調査） | IV 萱振遺跡（第10次調査） |
| II 久宝寺遺跡（第7次調査） | V 東弓削遺跡（第5次調査） |
| III 萱振遺跡（第9次調査） | VI 木の本遺跡（第4次調査） |

発行 平成3年12月

編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会

〒581 大阪府八尾市清水町1丁目2番1号

TEL(0729)94-4700

印刷 (株)近畿印刷センター

